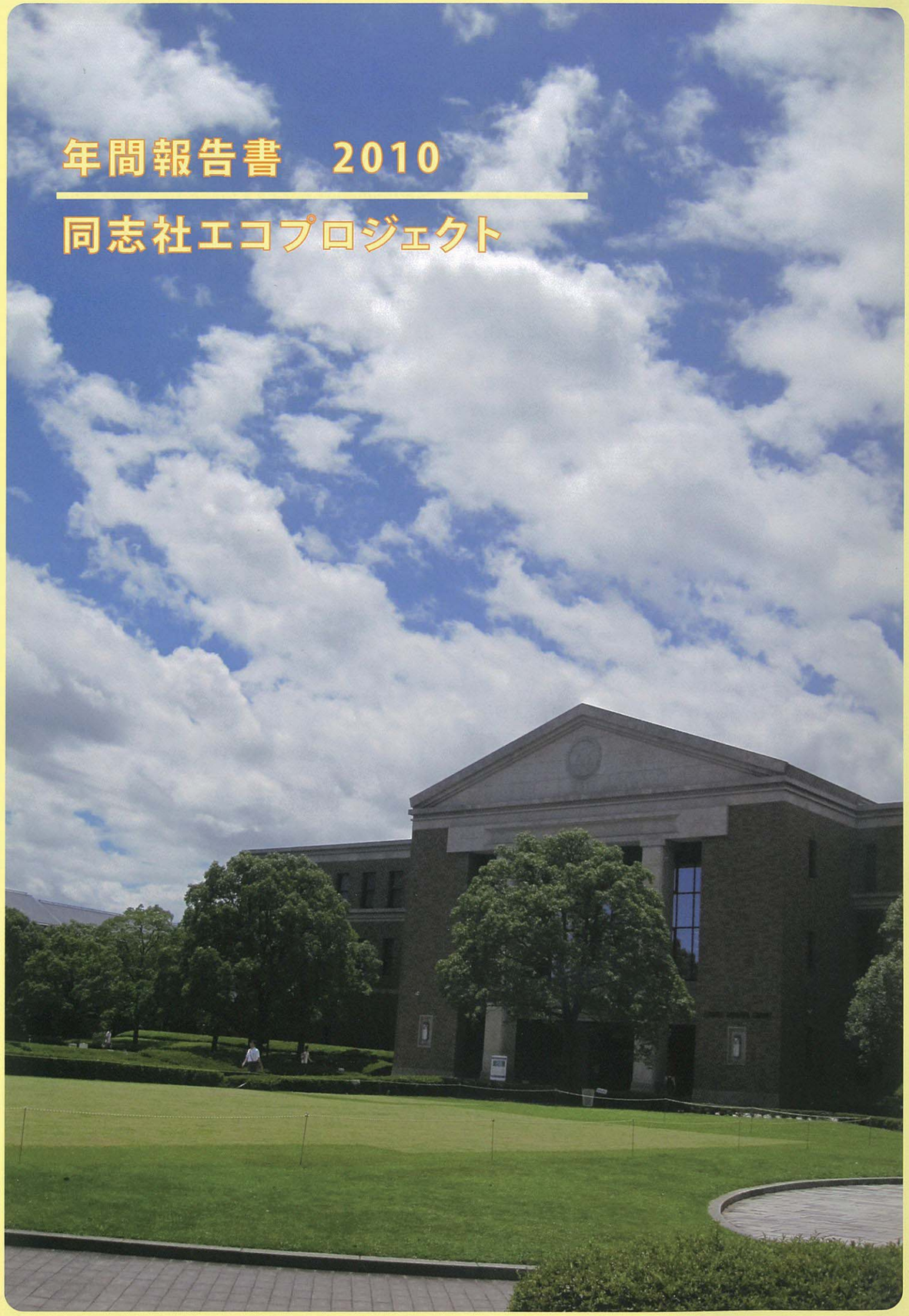


年間報告書　2010

同志社エコプロジェクト

Doshisha Eco Project 2010

同志社大学省エネルギー推進委員会
同志社エコプロジェクト（ＤＥＰ）
〒６１０－０３９４
京田辺市多々羅都谷１－３ ローム記念館２階　ＲＭ210
ＴＥＬ　：0774－65－7813
ＭＡＩＬ　：dep.asumi@gmail.com
ＵＲＬ　：http://eco-pro.doshisha.ac.jp/

はじめに

■2010年度の活動を振り返って…

2010年度のDEP活動は、組織設立から4年目に入り、空調温度の設定などの省エネ活動やEVE祭でのゴミの分別活動などの活動が以前より定着してきました。そのほかにも学内外で京田辺市の小学生や同志社国際高校の学生への環境教育、留学生との環境活動など多様に取り組むことができたということは組織として大きなステップになっていると思います。クローバー祭では展示ブースを設け、家族連れの来場者に楽しく環境について学んでもらう場を設けるなど、学生メンバーなりに外へ発信していく方法というものを確立していているようにも感じています。大学は、2008年4月、環境保全・実験実習支援センターを設立し、省エネをはじめとした環境問題への取組み、教育・研究の場の安全な環境整備をさらに進めることを開始しました。年間を通して、省エネを始め、環境活動に取り組めたことは大学の責任者として、とても喜んでいます。さらに学生の視点から活動を広げていってもらいたいと思います。

■来期へ向かっての抱負や展望（大学の視点で）

同志社大学は、学生数も多く、広大なキャンパスを擁しています。そのため、実際に省エネ効果をあげ、大量のごみなどの廃棄物を削減することは、なかなか困難なことです。しかし、大学と学生が連携し、目標達成に向けて取り組んでいくことで、着実に成果を上げることができると思います。

2010年度の夏には学内で教職員・学生が一体となって打ち水を企画・実施しましたが、そういった活動を学内だけでなく、行政、企業、市民など社会との連携も視野に入れて、積極的な取組ができればと希望しています。

大学の社会的責任の観点からも、大学と学生が社会との連携を進め、さらに効果的な環境問題解決に向けての活動を展開していきたいと思います。

横川　隆一
同志社大学　生命医科学部医工学科教授
省エネルギー推進委員会　委員長

2010年度でDEPは4年目を迎えました。最初に発足時から在籍していますが、振り返ると、意見や目的のすれ違いから去っていくメンバーや、折り合いがつかずできなかった企画など、失ってしまったものもたくさんありました。しかし、卒業された先輩方の様々な尽力や苦労があり、確かな成果を積み上げたからこそ4年目を迎えることができました。

受け継いだこの4年目は、省エネを始めとして、かつての企画を継続して続けることのできる力がついていたことを証明できた一方で、より活動の幅を広げようと新しい挑戦も見られました。環境問題は、現状の経済活動の歪みより生じ、長期にわたり影響する問題です。それに立ち向かう環境活動において重要なのは、「現状に甘んじないこと」、「継続すること」の2点であると考えています。だからこそ、この4年目の活動は、環境活動の根幹を体現できていた、と思っています。

最初に述べたように、私は発足時からのメンバーです。そして、そのメンバーの中で最後に在籍することとなりました。次年度からは、DEPを作ったメンバーによる、これまでの4年間とは違い、DEPが作ったメンバーによる新しい5年目が始まります。まだまだ現状に甘んじることなく進化していく、第2期DEPにますますのご声援をよろしくお願いいたします。

橋本　明英
同志社エコプロジェクト　第4代学生リーダー
同志社大学大学院工学研究科
数理環境科学専攻　修士課程2年次生

- 目次 -

01　はじめに
02　DEP概要
05　省エネ報告
11　全体会
15　＋E
19　GC
23　エココロ推進部びびび
25　あすみチャンネル
31　第2回環境学生討論会
33　EVE環境活動
34　WSEN(WSES,COP16)
35　特集 環境トピック
36　編集後記

同志社エコプロジェクト組織

理念と方針

理念

同志社大学において、学生・大学が共に環境問題を世界的視野で捉え、その問題解決に向けた活動を実践していく。そして、その成果を社会に対して還元していく。

方針

「エネルギー」「廃棄物」「自然環境」の３分野に主軸を置き、各分野の環境問題解決に向けて大学の特性を生かした多面的・継続的アプローチを行っていく。

DEP組織図

同志社エコプロジェクト（DEP）は、『同志社大学省エネルギー推進委員会』の下に環境活動を行う大学組織として、2007年に設立されました。『環境保全・実験実習支援センター環境保全課』によるサポートを受け、学生メンバーは運営と活動に励んでいます。活動体系は、省エネ活動や広報活動などの全体活動と、環境教育や映像制作などの特定のアプローチに特化した個別プロジェクトの２つを主軸として、多角的な活動を展開する形としています。

同志社大学

省エネルギー推進委員会

［事務局］環境保全・実験実習支援センター　環境保全課

同志社エコプロジェクト

運営部
本プロジェクトを未来につなげるための運営活動および、
本プロジェクトの現在の活動が円滑に進むための運営活動を行う部署

活動部
本プロジェクトの理念を達する、学生ならではの環境活動を実践・
提言していく部署

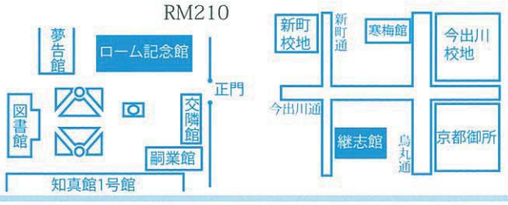
全体プロジェクト
省エネ活動

個別プロジェクト
GC（国際交流）　あすみチャンネル
＋E(環境教育)　エココロ推進部びびび

活動拠点

＜京田辺校地＞
同志社ローム記念館２F
RM210

＜今出川/新町校地＞
継志館３F第１教室



あすみちゃん

あすみちゃんは、DEPのイメージキャラクターです。「あすみ」という名前には「明日美」「明日見」「Earth美」など、DEPの活動方針を大きく、また広義に表しています。

2010年度活動紹介

DEPとして4年目となる2010年度は、個別プロジェクトを中心に活発に活動した1年間でした。2009年度よりようやく個別プロジェクト単体でも企画を手がけることができるようになりましたが、2010年度では、＋Eの「Let's go to 里山 学ぼう vol.2 -エコ博士への第一歩-」の開催や「第2回環境学生討論会」（第1回はGCによる主催）への参加など継続した活動を行うことができました。その一方で、GCは留学生との交流というように新たな活動形態を見出し、あすみチャンネルやエココロ推進部びびびのように新たな形でスタートするなど、まだまだ開拓精神を忘れずに挑戦することもできました。

春学期

4月
- 「あすみチャンネル」改訂
- 新歓活動

5月
- Let's go to 里山 学ぼう vol.2 -エコ博士への第一歩-

6月
- あすみチャンネル-Contribution-　完成
- 省エネ活動「夏期28度」開始

7月
- 上映会「Let'sエコキャンパスライフ 環境×学生=∞」
- でっぷっぷvol.7　校了&発刊
- 打ち水大作戦　実施

8月
- 第2回環境学生討論会 嬬恋村でのフィールドワーク

9月
- 夏合宿
- あすみチャンネル　中間報告会
- 「エココロ推進部びびび」発足
- 世界学生環境サミット2010 in チュービンゲン

秋学期

10月
- 第2回環境学生討論会 嬬恋村への政策提言
- あすみワールド inクローバー祭

11月
- スーパーフォトラリーZ　開催
- 同志社EVE参加

12月
- 省エネ活動「冬期20度」開始
- +Eの伝える絵本 - 水ものがたり - 実施
- エココン2010への参加
- COP16＠メキシコへの参加

1月
- 「N-up両面印刷普及活動」実施

2月
- 冬合宿

3月
- あすみチャンネル　最終成果報告会

個別PJ紹介

DEPの学生メンバーはいずれかの個別プロジェクトに所属し、それぞれの個性を生かして活動しています。現在、個別プロジェクトは４つあり、それぞれが定めたMissionやVisionに従って環境活動を展開しています。

＋E（プラスイー）

+E（プラスイー）は『DEPならではの環境教育を創造・実践し、「感じ・考え・動き出す」きっかけを与える』というMissionのもと、環境教育を行うプロジェクトです。その名前には"Environment", "Education", "Enjoyment"の３つのEをプラスできるような、楽しみながら環境を学べる授業を行おうという意味が込められています。2008年の秋に発足し、2009年度は京田辺市周辺の小学生が大学の里山で自然に触れ合う企画や同志社小学校での1ヶ月にも及ぶ環境教育プログラムを実施しました。

GC

GCとはGlobal Communicationの略で、『DEPの活動と世界の環境活動を送受信することにより、様々な人の環境意識・知識が向上する場を創出する』ことをMissionとし、環境と国際交流を結びつけて活動するプロジェクトです。2008年度に行った世界学生環境サミットを終えて、環境問題は国境を越えた問題であり、国際的な情報交換や活動が必要だという想いから発足しました。目指すVisionは「環境知識・意識を持つ人がスタンダードとなり、『地球人口＝環境人口』である地球を実現すること」です。

エココロ推進部びびび

エココロ推進部びびびは、エコマガジン"でっぷっぷ"や年間報告書の編集を手がけていた広報チームから発展し、2010年7月より設立されたプロジェクトです。新たにMission『DEPに関する広報活動や環境意識の啓発を行い、受け手の心に残るものを創る。それらの活動を通して、受け手に物事を伝えるノウハウを学ぶ』と、Vision『環境意識の高い大学と言えば同志社大学！同志社大学と言えばDEP！同志社大学の学生がそう意識することはもちろん、世間一般の方々にもそう認知してもらう』を掲げ、Vol.7を迎えたでっぷっぷや、エコなキャンペーンを通して環境啓発に取り組んでいきます。

あすみチャンネル

あすみチャンネルは、『DEPの活動から見える（を通して見える）「環境」をテーマにした映像コンテンツを創出・発信し、視聴者の環境に対する意識を高め、行動を促す』ことをMissionとした、環境問題がテーマの映像を通して環境啓発を行うプロジェクトです。2008年度より２年間、地域の企業と協力して活動していましたが、2010年度より新しいMissionとVisionのもと、再スタートを切りました。『京田辺から全国へ環境意識の改革を行い、環境に配慮することが当たり前の社会を目指す』ことをVisionとして、取材から編集し、上映するだけでなく、映像を組み合わせたコンテンツも扱いながら環境啓発を行っています。また、「同志社ローム記念館プロジェクト」の１つでもあり、同志社ローム記念館大賞を目指すことも目標の１つです。

同志社エコプロジェクト 省エネルギー活動2010 活動報告

省エネ活動とは

DEPでは、全体活動として、学生と大学の仲介役となる省エネ活動に取り組んでいます。そもそも、「同志社大学省エネルギー推進委員会」では、省エネ法(※)の遵守や社会貢献のために大学の省エネルギー化やエコキャンパス化に取り組もうとしていました。そこで、学生と大学の仲立ちとなる存在として設立されたのがDEPです。そのためDEPでは全員参加が必須の全体活動として、2008年度より、エアコンの設定温度を夏期28度、冬期20度に一律で設定する取り組みを行っています。また、活動を円滑に進めるために、立て看板の設置やアナウンス活動による周知活動や取り組みに関するアンケート集計、さらに、学生へのフォロー活動も推進しています。以下、本年度の省エネ活動とその成果を報告します。

※エネルギーの使用の合理化に関する法律
(通称：省エネ法)
総則「この法律は、内外におけるエネルギーをめぐる経済的社会的環境に応じた燃料資源の有効な利用の確保に資するため、工場等、輸送、建築物及び機械器具についてのエネルギーの使用の合理化に関する所要の措置その他エネルギーの使用の合理化を総合的に進めるために必要な措置等を講ずることとし、もつて国民経済の健全な発展に寄与することを目的とする。」
この法律に基づき、同志社大学は、2003年から京田辺キャンパスが第1種エネルギー指定管理工場に指定され、既存建物についてエネルギーの使用効率を年1%削減することが、目標値として求められるようになりました。

2010年度活動紹介

本年度の省エネ活動では、大学の省エネルギー化を推進するために、昨年度に引き続きエアコンの設定温度を夏期28度、冬期20度に一律で設定する取り組みを実施しました。また、大学にとっても、学生にとってもよりよい活動になることを目指すべく、4つの活動に取り組みました。

1 冷暖房の一律設定に関する周知活動

冷暖房の一律設定であることを学生に知ってもらい、取り組みに対する理解と協力を得ることを目的とする活動です。本年度も昨年に引き続き、活動を周知するポスターを立て看板に掲示して設置することや正門にてメンバー全員で省エネ活動への協力呼びかけをすることで、精力的に冷暖房の一律温度設定を周知しました。

↑立て看板とポスター

↑校門での呼びかけ(冬)

↓→立て看板の設置(夏)

2 教室の温度・湿度実測調査と学生に対するアンケート調査

現在の取り組みによる現状と学生の反応を把握し、省エネ活動の方針を見直すことを目的とした活動です。本年度も昨年度に引き続き、京田辺と今出川の両校地にて、授業時間内の温度・湿度を15分ごとに測定する実測調査と、授業時間の一部を頂いて学生を対象にした学内の省エネ活動に対するアンケート調査を実施しました。活動3年目ということで教職員さんへの周知が行き届いてきたのか、例年に比べて教員さんとのトラブルも比較的に少なく、円滑に活動できました。また、夏期・冬期のそれぞれでアンケートを集計し、実測調査の結果とともにまとめました。

↓教室での調査協力のおねがい

↑アンケート回収

温度湿度測定結果

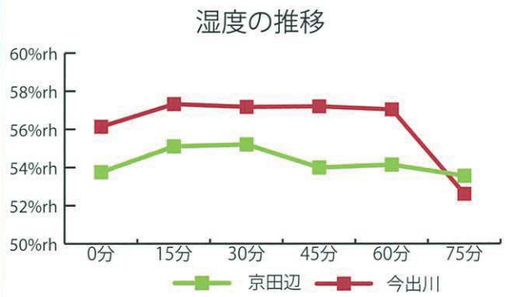
1講義を15分ごと分け、教室内の温度と湿度を測定しました。その結果をグラフで表すと下のようになります。グラフから温度は、夏期には両校地ともに28℃を下回っていました。また、温湿調査で、今出川と京田辺で教室内の温度の差が平均で約2℃、湿度で平均2%あることが分かりました。

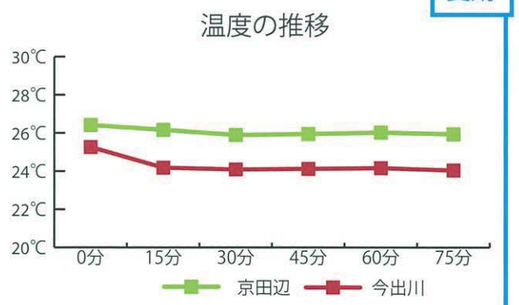
冬では90分の間、温度が21~22℃、湿度が約36%でした。2校地で比較すると、温度は今出川が平均約1℃高く、湿度はほとんど差はありませんでした。

このように、両校地で温度湿度が違いました。エアコンの省エネ設定温度は同じ28℃、20℃ですが、京田辺、今出川の校地周辺の環境の違い、各館の教室の大きさの違いなどが原因と考えられます。また一方、アンケート調査では、今出川と京田辺で学生の体感温度が大きく違うことが分かりました。つまり、同じ温度設定でも、教室内の温度湿度は違い、学生の体感温度も大きく違うということです。

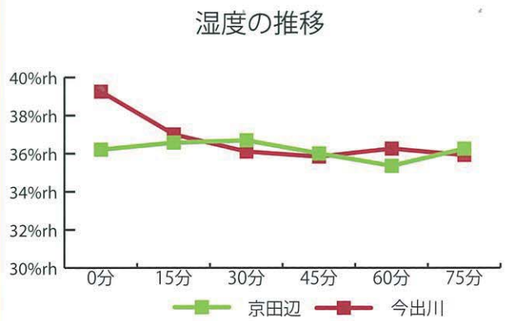
省エネ活動による学生の満足度と省エネの両立の為に、調査教室の変更や増やすなどの新たな調査方法によって、この問題の原因を明らかにせねばなりません。

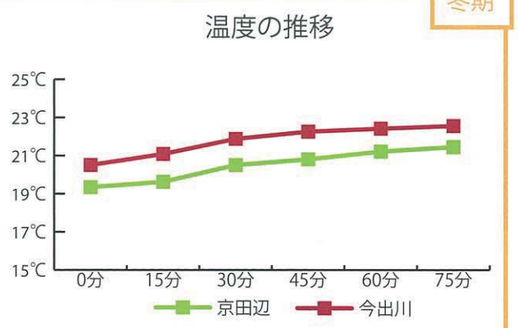
夏期





冬期





省エネアンケート調査結果（夏）

夏期の調査結果が下のグラフです。

Q1の認知度を確かめる設問ですが、京田辺・今出川両校地ともに大部分の学生に知られていることが分かり、周知活動の成果を感じました。

Q2、3では、実際に28℃設定の中で、学生が実際の室内温度をどう感じているのか調査しました。また、昨年度から変更した点として、今年度から講義開始、講義終盤と分けて学生の体感温度を調査しました。これは前年度の調査で、体感温度が講義開始時と終盤時で違うことが分かったためです。

結果として全体Q2-1、Q2-2では、京田辺で開始時に「暑い」「少し暑い」と答えたのが52%に対し、終盤では38%と大きく変化しています。このことから、時間が経つにつれて体感温度が下がることがはっきりしました。ただ、一つ懸念事項としては、「少し暑い」「暑い」と回答した学生の平均が、京田辺で45%、今出川で21%と大きく違うことです。

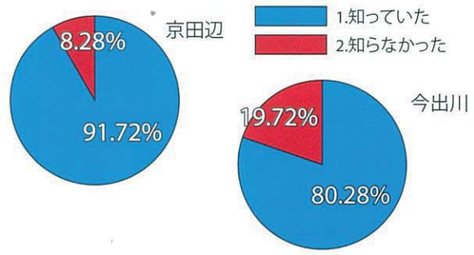
Q3においても「ガマンできる」と答えた生徒が、京田辺で平均68%、今出川で平均81%と大きく違います。

またQ4の、学生からの省エネに対する評価を問う設問では、「今後も実施していくべき」「改善して続けるべき」という意見が、京田辺が今出川に対して12%低いという結果が出ました。校地による差が出るのは、教室の違いか環境の違いか原因は定かではありませんが、今後対策を考えていかなくてはなりません。

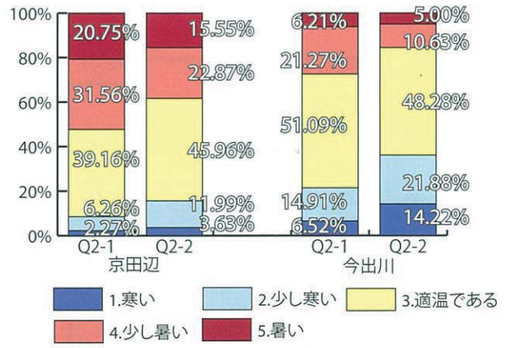
夏期アンケート調査数

		教室回収数	校地回収数	全体回収数
京田辺	TC2-101	1841枚	2914枚	3571枚
	MK302	1073枚		
今出川	M21	336枚	657枚	
	R302	321枚		

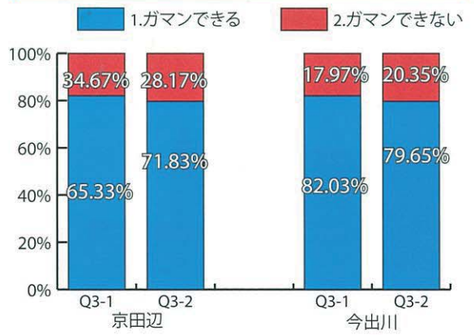
Q1. エアコン「28℃設定」の取り組みのことをご存知でしたか？



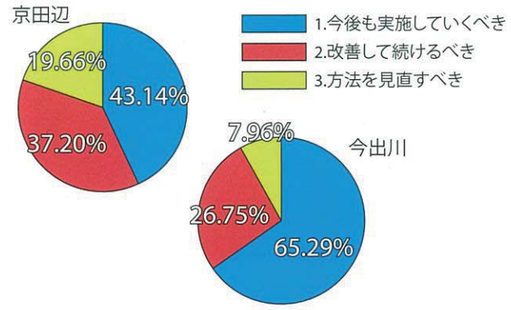
Q2.教室のエアコンの設定温度が変わりました。体感温度はどう感じてますか？（Q2-1講義開始時　Q2-2講義終盤）



Q3. この温度でガマンできますか？（Q3-1講義開始時　Q3-2講義終盤）



Q4.来年度もエアコンの温度を引き続き「28℃設定」をすることについてどう思いますか？



省エネアンケート調査結果（冬）

冬のアンケート調査では、夏とは異なる結果が多く見られました。

その一つがQ1の認知度を確かめる設問です。夏では両校地とも知っていると回答した人が80%以上であるのに対し、冬ではどちらも60%にも満たず、今出川校地では「知らない」と回答した学生の方が多いほどでした。この原因として、冬は夏のように学生に対する呼びかけを実施しなかったことが考えられます。この結果から、学生への呼びかけの重要性がはっきりしました。

Q2-1において、夏のアンケートでは、京田辺で52%、今出川で28%の学生が「暑い」と回答していたのに対し、冬のアンケートでは両校地とも「寒い」と回答した学生が、25%前後でした。

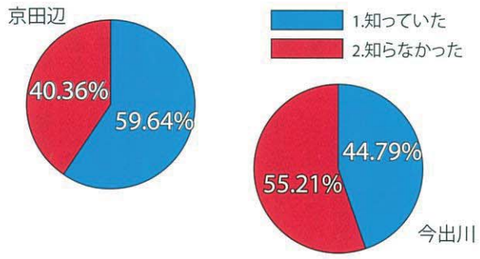
同様にQ3でも、両校地ともに「ガマンできる」と回答した学生は、講義開始時から終盤時にかけて、80%を維持していました。この理由は、冬のエアコン温度設定が夏よりも適していたから、また、寒い場合は上着を着る等対策を打てるからだと思われます。

Q4では、夏と冬を両校地の平均で比較すると、夏に「今後も実施していくべき」「改善して続けるべき」と回答した学生が両校地平均で54%であるのに対し、冬は両校地平均で67%であり、夏と比べて省エネに意欲的な学生が多いことが分かりました。このことから、学生が不快と感じているかどうかが、大学の省エネに対する理解に影響していると考えられます。

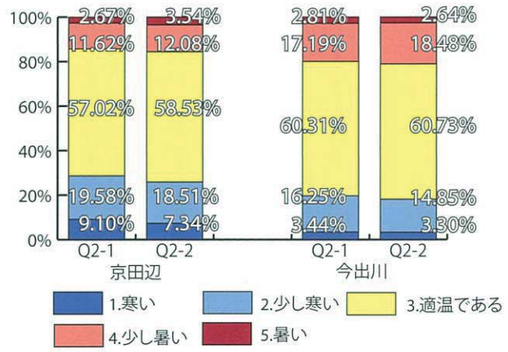
冬期アンケート調査数

		教室回収数	校地回収数	全体回収数
京田辺	TC2-101	1382枚	2070枚	2402枚
	MK302	688枚		
今出川	R302	332枚	332枚	

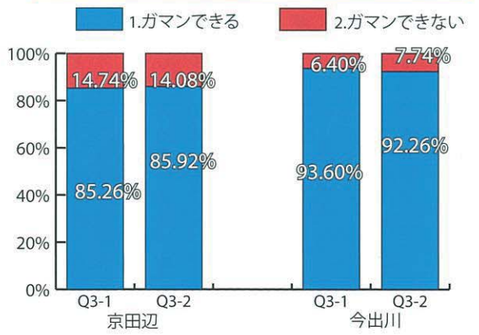
Q1. エアコン「20℃設定」の取り組みのことをご存知でしたか？



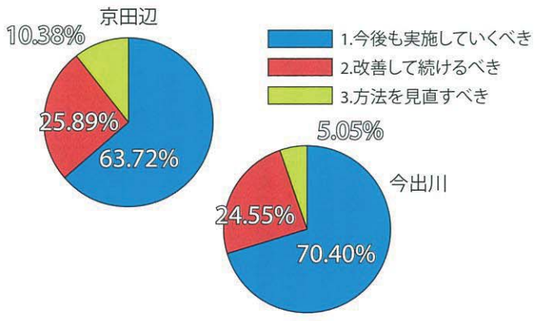
Q2.教室のエアコンの設定温度が変わりました。体感温度はどう感じてますか？（Q2-1講義開始時　Q2-2講義終盤）



Q3. この温度でガマンできますか？（Q3-1講義開始時　Q3-2講義終盤）



Q4.来年度もエアコンの温度を引き続き「20℃設定」をすることについてどう思いますか？



3 期間中の学生へのフォロー活動

学生の省エネの取り組みに対する理解と協力を深め、省エネ推進やエコキャンパス化の基盤をつくるための活動です。学生に歩み寄り、環境意識の向上や学生からの反発の軟化を行います。本年度は新たな取り組みとして、水資源を効率的に利用するという意識を啓発し、夏の暑さを少しでも軽減するために『打ち水大作戦』を実施しました。

4 大学へ報告書の提出と来年度以降の活動提案

アンケート調査や温度・湿度に関する実測調査の報告書をもとに、今後の省エネ推進活動提案書を大学に提出し、今後の省エネ活動をよりよく改善するための活動です。

今年度の夏期省エネ推進活動提案書では、アンケート調査から得ることができた一定の支持に基づき、本年度の活動を踏襲する方針を提案しました。新たな取り組みとして、次のような学生に対するアフターケアの実施を求めました。

1. 夏に暑くなる教室への扇風機の導入
2. 冷暖房のリモコン付近への告知シールの貼り出し
3. 同志社大学の公式ウェブサイトを利用した省エネ活動開始の周知

2011年3月現在、これらの提案はまだ採用されるかはわかりません。しかし、私たちDEPは、学内のエコキャンパス化に向けて、今後もよりよい省エネ活動を推進すべく大学に対して効果的な提案を継続していきます。

Pick UP!

打ち水大作戦!!

『打ち水大作戦』は、7月16日・19日の早朝に、学生がよく授業で利用する京田辺校地の知真館やローム記念館前で30分以上実施しました。

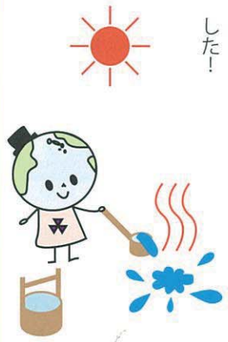
『打ち水大作戦』とは、同志社大学内で、夏期省エネ活動の期間中に大学の関係者と共に学内の中水という再生水を利用して大規模の打ち水を行うというものです。この企画は、打ち水の本来の意味合いである夏の暑さを少しでも軽減し、省エネ活動を円滑に推進することだけでなく、水の効率的な使い方を促すことや学内活動のあり方を大学全体で見つめ直すことも狙いとしていました。

当日は早朝にも関わらず、DEPの学生だけでなく、理工学部の教員の方々や環境保全課の職員のみなさん、大学の総務課の方々など多方面の方々にご参加いただき、参加者は両日合わせて60人にも及びました。

当初は夏の暑さを少しでも軽減するために始めたこの『打ち水大作戦』。しかし企画を振り返ってみると、一番の成果は、学生、教職員など大学の関係者が垣根を越えて共に活動できたことだと思います。『打ち水大作戦』を通して、一つの目的を実現するために大学関係者全体が手をとり合い協力する姿は学内活動の本来あるべき姿のように思えました。大学の省エネ活動も、『打ち水大作戦』の時のように、「学生と教職員が手を取り合い、大学全体でエコキャンパス化を目指す」、そんな理想的な学内活動にしていきたいと思います。

『打ち水大作戦』のここがスゴい!!

- ●費用を一切賭けない手作り企画
  打ち水に使用する水や容器の回収から広報活動まで、活動を通してお金は一切使っていません!
- ●企画始動から1カ月で実現
  6月の上旬に企画し、1カ月で企画を実現しました!
- ●口コミだけで60人の協力者
  およそ2週間の広報期間中、口コミだけで両日合わせ60人も参加者を集めました!



省エネ活動FAQ

省エネアンケートには様々な疑問・質問が寄せられましたので、その一部にお答えいたします。

Q 紙がもったいない

アンケートの際に使用した紙は、DEPのミーティングに利用する数々の配布物の裏紙、メンバーのメモ用紙などに利用しております。無駄にはなっておりませんので、ご安心ください。しかし、アンケートの電子化もおもしろいかもしれませんね。

Q 教室ごとに変更して欲しい

校舎によって温度を教室単位で調節できる所とできない所があるため、教室ごとに温度を調整するのは非常に困難なことだと言えます。また、個別調整できても、教室の状況は常に変化するため、容易ではありません。しかし、改善すべき問題ではあるので、検討いたします。

Q 気候によって変更すべき

そうですね。日々変わっていく気温・湿度に対し、数か月一定の温度設定であるのは、問題があるかと思います。時間毎では難しいですが、まずは、日単位、週単位での変更を、大学側と話し合っていきたいと思います。

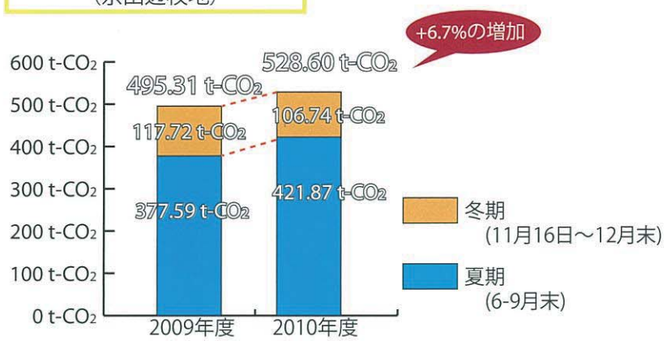
2010年度削減効果

1年間の省エネ活動にも関わらず、京田辺キャンパスでの2010年度のCO_2排出量は、2009年度と比べて増加していました。特に夏では大きくCO_2排出量が増加しています。夏季の夢告館系統の建物以外が出すCO_2排出量は2009年度よりも大きく差をつけて増加していました。

また、冬でもほとんどの建物のCO_2排出量が減少していますが、その一方で恵道館のCO_2排出量が1t増加していました。

以上のように、夏冬ともにCO_2排出量がうまく削減できていない面がまだまだあることが分かります。この状況を打開するためにも同志社大学の省エネルギー化をますます推進しなくてはなりません。2010年度のような結果に終わらないように、職員、学生が一体となって、大学内の省エネ活動に取り組むことが必要となってくるでしょう。

冷暖房によるCO2排出量
（京田辺校地）



	夏期(6-9月末)		冬期(11月16日～12月末)	
	2009年度	2010年度	2009年度	2010年度
知真館1・2号館	97.46 t-CO_2	108.84 t-CO_2	44.87 t-CO_2	42.68 t-CO_2
知真館3号館 図書館・食堂含む	174.56 t-CO_2	199.17 t-CO_2	43.52 t-CO_2	37.24 t-CO_2
夢告館系統	62.83 t-CO_2	67.61 t-CO_2	12.64 t-CO_2	11.93 t-CO_2
情報メディア館	23.35 t-CO_2	23.15 t-CO_2	10.93t-CO_2	8.39 t-CO_2
恵道館	19.40 t-CO_2	23.10 t-CO_2	5.76 t-CO_2	6.50 t-CO_2
合計	377.59 t-CO_2	398.77 t-CO_2	111.96 t-CO_2	100.24 t-CO_2

大学職員さんからのコメント

『施設課の視点から見て、同志社エコプロジェクトのこれまでの省エネ活動は大学全体にどのような影響を与えたと考えられますか?』

これまで省エネ活動は大学が強制的に押し付けるというイメージもあったと思います。

同志社エコプロジェクトの活動により、今まで使用者の判断に委ねられていたエネルギーの使用に基準（夏の冷房温度設定28度、冬の暖房温度20度設定）ができました。

さらに、大学の押し付けではなく省エネ意識の高い学生が自主的に活動し、一定の成果をあげている点が、他大学に先駆けた画期的な取り組みであると思います。

『今後、省エネ活動に関して、施設課から同志社エコプロジェクトに求めること、期待することは、どういったことですか?』

遠慮せずにどんどん活動して欲しいと思います。

学修環境と省エネ施策との折り合いをつけることは、大変難しいことであり、学生の理解があって初めて可能となります。

これからも、大学全体の省エネ意識の向上に取り組んでいただけたらと思います。

2010年度を終えて

本年度は、エアコンの設定温度管理による省エネ活動を基軸に、学内の省エネ化に向けて様々な取り組みを行いました。ただ結果として、京田辺キャンパスにおけるエネルギーの使用量は昨年度比で増加しています。同志社大学には、エネルギーの使用効率を年1%削減するという社会的な責任があり、学内全体でこの結果を真摯に受け止めなければなりません。今後はDEPも、大学の省エネ化に関与するだけでなく、大学のエネルギー効率を改善するように、LED照明の導入や老朽化したシステムの代替を求めていく姿勢が必要です。継続して取り組むことに意義のある省エネ活動も、何かを変えなければならない1つの転換期を迎えているのではないでしょうか。

（2009年度省エネ担当者）

省エネ活動は、本年度で3年目を迎えました。その中で、まだまだ十分とは言えませんが、徐々に学生のみなさんや教職員の方々の理解と協力も確実に得られるようになりました。残念ながら、今年度のエネルギーの使用効率は増加となってしまい、この事実は厳しく受け止めなければならないと思っています。しかし、だからこそ、今こそ新たなる第一歩を踏み出す時期が来ているのではないでしょうか。法の遵守などはもちろん、それ以上にエコキャンパスとして誇れる大学であってほしいと考えています。その為にDEPは今まで以上に、学生、大学のそれぞれが一体となり、Win-Winの関係となるように、邁進していきたいと思います。

（DEP　2010年度学生リーダー）

2010年度全体会

DEPでは月に一度メンバー全員が参加する全体会を行っています。毎回全体会を企画するメンバーは異なっていて、企画するメンバーによって全体会の形式やテーマが様々ですが、共通する全体会のコンセプトは「メンバーの自己成長」と「環境に関して知識を深めること」です。日頃プロジェクトごとに分かれて活動しているメンバーが一同に会し、議論することで、メンバーが各々持っている環境に対する考えや知識が共有され、よりいっそう知識が深まっていきます。そしてそれがメンバーの自己成長にもつながっています。

2010年度全体会のすべて

月	テーマ・内容	担当
4月	新歓を兼ねたPJ報告&フォト1	新歓チーム
5月	省エネに関するディベート	省エネチーム
6月	ごみ拾い	有志メンバー
7月	夏合宿予行(授業練習)	夏合宿運営チーム
8月	夏合宿	夏合宿運営チーム
9月	広告	びびびメンバー
10月	COP10に関して	1回生の有志
11月	討論会の成果報告会	第2回討論会チーム
12月	(この月は開催されませんでした。)	
1月	DEPの歴史&リーダー選挙	選挙管理委員会
2月	冬合宿	冬合宿運営チーム
3月	卒業生最後の全体会	卒業生

4月期全体会

〈PJ紹介&フォトラリー〉

この全体会では、DEP全体と個別プロジェクトについての説明をそれぞれのリーダーに行ってもらいました。この全体会は新メンバーやDEPに入ろうか迷っている人に「DEPの魅力を伝えること」が目的だったので、パワーポイントを使った詳しい活動の説明が中心でした。そして午後からは既存メンバーと新メンバーとの交流を深めるため、さらにDEPのキーワードである「環境」を意識してもらうためのフォトラリーを行いました。新メンバーと既存メンバーを混ぜたチームを作り、1時間かけて京田辺キャンパス内で「自分にとっての環境」を写真に収め、プレゼン大会を行いました。参加者全員に楽しんでもらうことができ、満足のいく全体会でした。

〈企画者の感想〉

新歓期ということもあり、企画者全員が忙しかったために十分な準備が出来ないまま当日を迎えてしまいました。それでもDEPメンバーの底力とサポート力で何とか成功させることができました。この全体会をきっかけにDEPに入ってくれたメンバーには、全体会の目的の一つである、「DEPの魅力を伝える」ことができたからだと思っています。

6月期全体会

〈ごみ拾い〉

この全体会では、3チームに分かれて学校周辺のごみ拾いを行いました。これまでの全体会は部屋の中でのワークショップが多かったので、このように外で行う形式のものは珍しく、雨が降っていたのにもかかわらずみんな楽しそうにごみ拾いを行っていました。ごみ問題というのは私たちにとって身近な環境問題なのですが、DEPではプロジェクト活動を優先しがちな面があり、十分に取り組めているとはいえません。ですので、このごみ拾いはDEPメンバー全員にとって良い機会となりました。

〈企画者の感想〉

6月期全体会で自分たちの体を動かす環境活動「ごみ拾い」をすることにした背景には、自分たちの体験から何かを気付く機会が少ないことがありました。

いざごみ拾いをしてみると、ごみの量はみんなが想像していたよりもはるかに多く、その種類もビン、カン、ペットボトルから粗大ごみやDVDに至るまで様々なごみがありみんな驚きました。

企画した私としては改めて環境団体として大事な「ごみ問題」に対するみんなの思いを感じることのできる全体会でした。

11月期全体会

〈討論会の成果報告〉

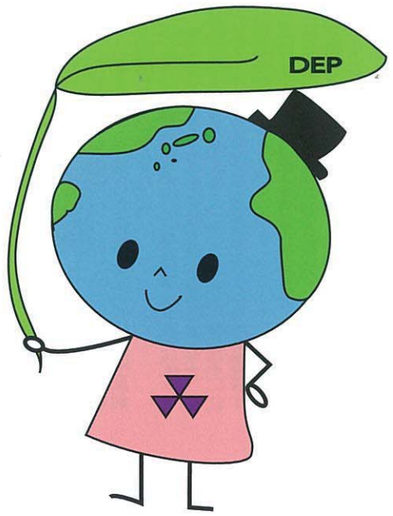
この全体会は、第2回環境学生討論会に約半年間参加していたメンバーがその中で得た知識や意識をDEPに還元するために開かれたもので、最大の狙いとして"チーム力"の強化を掲げていました。日本の農業や新エネルギーなどに関する知識を問うDEP年末テストや実際に嬬恋村向けに作成した2つの政策プランの紹介、自分自身の短期的な目標をつくるワークショップといったプログラムで構成されたこの全体会には、今期最大の参加者が集まりました。普段、各プロジェクト間でお互いの様子を知る機会が少ない中で、互いの活動を知ることの有意義さを実感できる良い全体会となりました。

〈企画者の感想〉

11月期全体会は、「環境に関する知っておくべき基本的な知識」の習得と団体を円滑に運営させていく上で必要な「チーム力」の強化という狙いを持って実施しました。環境に関する見識が広がるように、参加者の自己成長につながるように、工夫を凝らして全体会を開催することは、全体会企画者の自己成長にもつながるのだと改めて実感しました。

総括

今年度の全体会は、学内における省エネ活動や各プロジェクトの成果のDEPへの還元など、DEPの活動にリンクしたものが多かったです。全体会を通じて他のプロジェクトの活動内容を知ったり、メンバー間で環境に対する考えの共有が行われ、DEPメンバー全員の環境に対する思いが深まっていきました。また企画を考えるメンバーにとっても、自分の経験をどのようにして全体に還元するのかを考えていくうちに自分の経験を再確認することができました。これらによって全体会自体がDEPの全体活動や個別プロジェクトの活動を円滑に進めるための潤滑油のようなものになりました。



夏合宿

【夏合宿目的】
①資源・エネルギー問題に対するDEPの学術力を強化すること
②企画を行っていくために必要な力（目的を一貫して保持する力、相手目線で考える力、自分の役割を意識する力）を養うこと
③普段あまり接触の無いメンバー間で交流すること

【夏合宿概要】
2010年9月1、2日に、琵琶湖リトリートセンターにて、三つの目的を持って夏合宿を開催しました。
この企画の中心となったのが、「資源・エネルギー問題」に関する四十分間の授業の企画・実施と、同テーマに関する研究論文の作成です。授業は、参加者の授業企画を行う参加者、また授業を受ける参加者側の双方の知識向上に役立つと考えました。またチームでの授業企画によりプロジェクト運営意識を高める狙いもありました。このメイン企画を中心に合宿準備・そして当日のプログラムは行われたのです。

○当日までのスケジュール
参加者への合宿のテーマや内容の発表は、DEPの7月全体会にて行われました。この時、実際に数チームに分かれ、興味があることについて簡単な授業を行い、夏合宿に向けて授業のポイントなどを確認していきました。
その後参加するメンバーは、当日のチームに分かれ実際に授業の準備を進めていきました。知恵を絞り、何度も授業のテーマや目的を練り直していきました。また、事情があって当日参加できないメンバーを中心に、研究資料の作成も並行して進められました。授業テーマに関する授業では紹介しきれない詳しい情報を膨大な資料から集め、それを論文の形式でまとめていきます。論文形式の文章を書くことが初めてのメンバーが大半でしたが、各自で書式を学び作業を進めていきました。

○当日の様子
今回の夏合宿の一日目は昨年と違い勉強＋レクで盛りだくさんなものでした。昼食を取った後最初に行われた企画は、環境問題に関するクイズ大会でした。クイズという親しみやすい形式ながら内容は大変充実しており、参加メンバーは楽しみながら環境問題についての多様な知識を習得していきました。
次に、研究資料の展示発表が行われました。バイオマスを扱ったものや発電所についての研究など、各チームが力を入れて作成した資料をメンバーは真剣な表情で確認していきました。
夜には、翌日の授業に向けた最終準備を行いました。いつ誰が何をするか、どこで何を使うかなど、動きの確認を中心に作業していきました。「質問力」に関するレクチャーも行われ、授業をさらに深く理解する為の視点を学びました。
二日目は1ヶ月の成果と今後に活かすものでした。まず朝に各チームによる授業が開始しました。授業では画用紙を使うチームもあれば、燃料電池の実演を行うチームもあり、多様な手法でより分かりやすい授業になるように各自工夫を凝らしていました。授業を受けるメンバーも、時には楽しく、時には深く授業に入り込み、充実した時間を過ごしていました。
最後には、学生同士でのフィードバックの時間が設けられました。授業・研究を作っていく中での反省点は何か、それはどうDEPに活かすことができるのか。各チームで多様な議論がなされ、出た改善点を全体で共有しました。

【総括】
今回の合宿では授業と研究でのメンバーの努力がたくさん見受けられました。授業や研究を行う為にチームのメンバーと協力し、その中で得た貴重な知識や経験は今後のDEPの活動に活きてくることになるでしょう。それを見ると今回の夏合宿の目的はある程度達成できたように思えます。
しかし、メンバーと上手く連絡が取れず、個人作業が多くなってしまったチームもありました。また、内容不足を他のチームから指摘されてしまう研究もありました。このように上手くいかなかった点も多く見受けられ、今後のDEP活動全体に活きる貴重な反省点も得られました。

冬合宿

【冬合宿目的】
①1年間の活動の振り返ること
②問題意識の共有と解決策を考えること
③DEP以外で得た知識や経験や成果をDEPに還元してもらうこと

【冬合宿概要】
2月26日(土)、今出川キャンパス至誠館33番教室にて、冬合宿を開催しました。2010年度のDEPの活動を振り返るとともに、来年度以降の活動に向けて考えるよい機会になりました。また、今回はバラエティに富んだ内容だったため最初から最後まで楽しんでもらうことができ、いい雰囲気で冬合宿を終えることができました。

○当日までのスケジュール
今年度の冬合宿は2月に開催されることになっており、3回生の就職活動やDEP年間報告書の作成の時期と重なっていました。そのために今年度の冬合宿は吉本、浅井、金森の3人での企画・運営となりました。およそ2ケ月間で、「目的」「スケジュール」「プログラム内容」を決めてそのための準備を入念に行いました。

○当日の様子
講演：丸吉がCOP10やビジネスコンテスト、インターンといった、DEP以外の活動で得た経験と知識を「自分が思う理想のDEPと理想の自分」というタイトルで30分間話してもらいました。最後にメンバーそれぞれの後の目標をたてました。
授業：プロジェクト科目「環境教育教材作成プロジェクト－環境マインドを持った次世代リーダーの育成」において制作された「環境楽習すごろくeco city」を全員で行いました。環境問題についてチームでディスカッションをしたり、環境に関するクイズを行いました。
個別プロジェクト活動報告会：今年度行った企画を個別プロジェクトごとに発表してもらいました。
ワークショップ：日頃DEPに対して抱いている問題点をチームに分かれて共有し合い、その問題解決に向けて、今後どういう取り組みをすればよいかを具体的な案まで落とし込む作業をし、最後にみんなの前で発表してもらいました。

【総括】
各プログラムにつき1人が責任を持って担当するという方法を取り、各々の得意分野である内容にしたため、とても質の高い企画が出来上がりました。1人1人の能力をうまく持ち寄ることができればいいものを作り上げることができることを再確認できた冬合宿でした。さらにこの冬合宿を通して、今まで以上にDEPという団体を見つめ直すことができ、今後の活動を考えるいいきっかけになりました。

＋Ｅ　一年間の軌跡

＋Ｅの2010年は、『Let's go 里山　学ぼう！vol.2 ～エコ博士へのはじめの一歩～』（以下、里山企画）と『＋Ｅの伝える絵本～水ものがたり～』（以下、絵本企画）の二つを柱にした活動でした。里山企画では、「生物多様性」を、絵本企画では「水」をテーマにして、「＋Ｅらしさ」、「感じ・考え・動き出すきっかけづくり」という点に力を入れて企画しました。里山企画では、自然にふれあうということ、絵本企画では、絵本を作ってみるということによって「環境」に親しみを持ち、考える機会を作りたいと思っていました。

『Let's go 里山　学ぼう！vol.2 ～エコ博士へのはじめの一歩～』

～企画の実施にあたって～

同志社大学京田辺キャンパスには、キャンパス内に里山があります。その里山では、小道がありさまざまな植物や虫が生息しており、自然を感じるにはいい場所です。

私たち＋Ｅは、子どもたちに自然とふれあってほしい、身近に感じてほしいと思っていました。日頃の生活では、里山に入る機会もあまりないのではないかと想像していたからです。このような理由から、一日を通して、じっくりと自然を楽しんでもらおうと、「レクチャー」、「さんぽ」、「招待状づくり」、「ふりかえり」というプログラム構成にしました。「招待状をつくる」という時間を設けたのは二つ理由があります。一つ目は、里山のこと、自然の様子をより多くの人に知ってほしいからです。二つ目は、「招待状をつくる」という形でアウトプットすることによって参加してくれた小学生の定着度も高めたかったからです。

目的：楽しみながら自然のもつ豊かで多様な表情を感じることによって、「環境」という言葉に壁をつくらないようにし、子どもの知的好奇心を刺激して自然を大切にする心を養う。さらに、今後子どもたちが自ら自然とふれあう機会を作っていくきっかけづくりとする。

日時：２０１０年５月15日（土）
　　10時～15時
場所：同志社大学
　　京田辺キャンパス内里山
参加者：京田辺市の小学生　６名
内容：はじめに、「レクチャー」として「生物多様性」をテーマにしたペープサートを使った劇をおこない、生物が生きていくための「つながり」について子どもたちに考えてもらいました。この劇では、自分ひとりの力で生きていると勘違いしている1匹のウサギが、森の動物たちとの出会いによって生き物がつながり、支えあって生きているということを知る物語です。次に、「さんぽ」として、里山の中の小道を歩きながら、植物や虫の観察をしました。その後、お昼の休憩をはさんで草花遊びをしました。草相撲や冠づくりをしました。里山での学びをまとめるために、招待状を作りました。この招待状は、父母や兄弟、祖父母に宛てて書きました。画用紙に絵を描いたり、里山で集めた草花を貼りつけたりしました。最後に、「振り返り」を行いました。小学生・大学生が一人ずつ感想を言っていきました。

当日までの流れ：企画書提出は二月末でした。準備開始は、大学が春休みの三月。週1回、ミーティングを行いながら企画の詳細について決定していきました。備品等の準備は、四月、五月で行いました。本番、までに何度か里山の調査をしたり、劇の準備、練習をしたりしました。

〈当日の様子〉

同志社大学で開かれた里山企画は、晴天に恵まれ、午前10時より開催されました。参加する小学生は四名に対し、ＤＥＰから参加するスタッフが合わせて20名と、小学生が委縮することへの心配と、これから始まる企画への期待とが混在した気持ちでスタートをしました。

また、スタッフの中には、あすみチャンネルの撮影隊もおり、里山企画の一時をそのレンズに収めようと意気込んでいました。

【レクチャー】

受付をすました子どもたちへのはじめのプログラムは、レクチャーです。自然を見る視点として、「生物多様性」をわかりやすい紙芝居とペープサートでお話をしました。レクチャーでは、「つながり」をキーワードに、様々な生き物がつながっていることが生物多様性であり、三つの多様性（種の多様性、遺伝的多様性、生態系の多様性）を子どもたちにも伝えていきました。

子どもたちは、はじめに難しい内容の話をしたためか、また大学生の人数に圧倒されたためか、始終緊張した様子でしたが、一生懸命大学生の話を聞いてくれました。

【さんぽ】

次に、里山の中を歩きながら生息している植物を観察していく「さんぽ」をしました。レクチャーではかたい印象のあった子どもたちですが、体を動かしたり、大学生が積極的なに働きかけたせいか、徐々にうちとけていきました。

腐った木の内部が土のようになっていること、木の影が長くあるところにはシダ植物が多いことなど、普段の生活では知り得ないことを知ることができました。また、いつもなら立ち止まってまで見ないものをじっくり観察するいい機会になったと思います。

【草花遊び】

昼食の時間には、草花を使った遊びを子どもたちと共に楽しみ、親交を深めました。オオバコの茎を交差させ、どちらかが切れるまで引っ張り合う「オオバコ相撲」やシロツメグサの首飾りなど、子どもたちも知っている遊びもあり、積極的な交流ができました。

【招待状】

昼食後は、今までの活動をまとめる作業です。子どもたちには、里山のことを親しい人に向けた招待状としてまとめてもらいました。招待状と言っても文章だけでなく、絵も描いてもらい、さらには散歩のときに採った植物を招待状に貼りつけ、世界で一つのかわいらしい招待状が出来上がりました。

【振り返り】

さらに、これまでの活動を子どもたちに定着させることをねらいとして、振り返りを行いました。子どもたちの招待状を全体で発表してもらい、里山企画の全体を通しての感想を聞きました。子どもたちからは、「草花遊びが楽しかった」や「レクチャーが少し難しかった」などの意見が聞かれました。

～最後に～

この企画では、はじめ子どもたちに緊張は見られましたが、体を動かしたりするうちに大学生と打ち解けていく様子がありました。このプログラムを通して、子どもたちには、草花などの自然環境と触れあえる機会と生物多様性という環境に関する知識を与えられたのではないかと思います。また、子どもたちの中にも生き物に詳しい子がおり、ただ教えるのではなく、子どもたちと大学生の双方向で学び合えるプログラムになったように思われます。

～感想～

【＋Ｅ】

○午後から子どもたちに疲れが見えたのが気になりましたが、子どもたちが楽しそうに遊んだりしゃべったりしているのを見てほっとしました。参加した大学生も楽しめたみたいで、子どもたちに限らずいろんな人にとっての環境への「きっかけ」になったのではないかと思います。（三河　千里）

○初めての企画なので、足を引っ張ったかもしれませんが、企画を通して＋Ｅになじめたように感じる。目的はある程度達成されたのではないかと思っています。生物多様性が難しかったが、知的好奇心を刺激する企画になったのではないかと思います。（小野　香織）

【当日スタッフ】

○子どもたちの記憶に少しでも残ればいいなと思いました。全体を通してかなりスムーズでした。「子どもたちのためにやっている」という意識が随所に伝わってきました！（村田　涼平）

○外で遊ぶのが好きな子どもたちは、思っている以上に環境について知っているのでビックリしました。その中で、環境に関することをその子たちが他の子どもたちにも知らせてあげられるようにアプローチしていくことができればよりいいと感じました。（丸吉　宏和）

『＋Eの伝える絵本～水ものがたり～』

～企画実施にあたって～

この絵本企画は、大学生・高校生・小学生が一緒になって「環境」、とりわけ「水」をテーマにした絵本を一緒に制作するといったものです。環境をテーマに扱った絵本作りを通して、より多くの子供たちに生活の身近なところにある「水」、そして「環境」について深く考えてもらい、環境に対して高い意識を持ってもらいたいと思い、この二日間の企画を考えました。高校生には自主的に環境教育に取り組んでいってほしかったので、大学生は高校生のサポートをするという形で本番に向けて準備を行いました。

～なぜ絵本を扱ったのか～

絵本であれば、難しい内容でも子供たちに親しみやすく感じてもらえるし、伝えたいことがシンプルに表現できるからです。このような絵本の特徴から、子どもたちの想像力を活かすことができるのではないかと考えたからです。

目的：大学生（＋E）と高校生とこどもが同じ「水」というテーマから環境を考え、考えの深さや発想の違いを発見する。また、絵本を用いることで教える側も学ぶ側も楽しめる環境教育を行い、環境にプラスなイメージを与える。

日時・場所：12月19日（日）10時～17時 @同志社大学ローム記念館オープンスペース

12月23日（木・祝） 10時～17時 @つくるところ［京阪東ローズタウン 共育ステーション］

参加者：私立同志社国際高等学校の高校生2名と「つくるところ［京阪東ローズタウン共育ステーション］」に所属する小学生6名

※「つくるところ［京阪東ローズタウン共育ステーション］」とは、松井山手にあるこども保育施設。NPO法人関西こども文化協会とNPO法人プラス・アーツが協働し、子育て家庭が安心して子育てができるようなサービスの提供を行っている。

第一回目は大学生と高校生で集まり、絵本の絵以外の全部分（絵本で伝えたい内容や絵本のテーマ、ストーリー構成文章、せりふ等）を決定し、作成しました。第二回目は小学生も一緒になって「環境」と「水」をテーマにした絵本の絵の部分を皆で制作しました。

～準備期間～

まず絵本の研究をしました。絵本研究の目的は大きく分けて2点です。1点目は上記でも述べましたが、絵本を扱うことでどのようなメリットがあるのかを調べるためです。2点目はおもしろい仕掛けを探すためです。飛び出す絵本や窓付きの絵本など面白い仕掛けのなされた絵本にどれほどパターンがあるのか調べるためです。これは各々が自主的に調べて、その後＋Eメンバー内で情報共有をしていきました。

《1回目》

12月19日（日） @同志社大学ローム記念館オープンスペース

【アイスブレイク】

最初に、高校生と＋EメンバーでLinking Mapを作成しました。ポストイットに自分の特性を書き、模造紙に貼りつけました。そしてお互いにつながるところを探しだし、つなげ、お互いを知り、親睦を深めました。

次に私たちは「絵本作りチーム」と「資料集めチーム」の2つのグループに分かれ、役割を分担しました。「絵本作りチーム」は第1回目の本番で高校生に見本として紹介する絵本を作成しました。それと並行して、本番でのその絵本の読み聞かせの練習や、高校生や小学生が絵本作りをする際の司会進行についての企画・運営も担当しました。一方「資料集めチーム」は本番で扱う水に関する資料作りなどの絵本作り以外の環境教育の企画・運営を担当しました

その後、資料チームが集めた資料に関して、勉強会を2回開催しました。

本番前日は同志社ローム記念館オープンスペースにて＋Eメンバーでリハーサルを行い、企画の進行に問題点がないかを再確認しました。

【読み聞かせ】

＋Eが事前に作っておいた絵本を高校生に聞いてもらいました。この絵本は＋Eが考える絵本の持つ力、「シンプル！ 親しみやすい！ 想像力を活かせる！」の3つを盛り込んだもので、しかけやふろくなどの工夫を施し、高校生が絵本を作る際のヒントになるように仕上げたものです。読み聞かせのあと、高校生に感想を聞いてみると、＋Eがこの絵本で伝えたかった「水がきれいだったら、人だけでなく生き物も快適に過ごせる」ということをしっかり感じ取ってくれたようでした。また、＋Eの絵本のポイントを解説した際には、メモを取りながら真剣に話を聞いてくれました。

【～起○○結を埋めよう～】

＋Eの資料チームが用意した水に関する資料を用いて、大学生と高校生が話しながら、絵本で伝えたいことを考えました。資料の中には＋Eの水に関するエピソードもあり、高校生と話し合いながら子どもたちに水についてどういうことを伝えたいのか、どういうことを考えてほしいのかを軸にストーリーを考えていきました。

【絵本作り】

ホワイトボードに絵コンテを描いていき、具体的なストーリーを考えました。16ページのうち半分だけを高校生と＋Eメンバーで模造紙に絵を描いていき、残りの半分は2回目の日につくるところで子どもたちと一緒に描くために残しておきました。

《2回目》

12月23日（木・祝） @つくるところ［京阪東ローズタウン共育ステーション］

【子どもたちに絵本の読み聞かせをしよう！】

1回目に作成した絵本を高校生2人が子ども達に読み聞かせをしました。2人ともこの日のために読み聞かせの練習をしてきてくれたので子どもたちの様子を見ながら読み聞かせができていました。

【絵本づくり】

子どもたちに描きたいページを選んでもらい、数人ずつにわかれて模造紙に絵を描いていきました。子ども達の想像力を活かして、思うままに描いてもらいました。つくるところにあったさまざまな種類の画材で、子ども達自身が考え、ときに、驚くような工夫も凝らしながら一生懸命絵本作りに励んでいました。お昼休憩も挟みつつ、長時間にわたる絵本作りでしたが、子ども達も高校生も＋Eのメンバーも時間がたつのを忘れて楽しく取り組むことができました。最後に、絵を描いた模造紙を段ボールに貼り付けて、絵本が完成しました。

【みんなで完成した絵本を読んでみよう！】

完成した絵本を立てて、子ども達が絵本の周りをまわりながら読んでいきました。子どもたちは自分達でつくった絵本を嬉しそうに読んでいました。

【子どもたちに感想を聞いてみよう！】

絵本を読んだ後、子ども達にワークシートの記入をしてもらいました。今回の絵本の「水をきれいにするのは大変だ！」という高校生の思いが子ども達に伝わったのかを聞いてみました。この絵本では、汚い水がきれいになる過程が描かれていて、ろ過装置が登場します。そのろ過装置と同じ働きをするものが自然の中に存在しているのですが、それが何か子どもたちに問いかけてみました。しかしほとんどの子ども達は自然の中のろ過のしくみについては知らなかったので＋Eが子ども達にそのしくみについて説明しました。絵本作りから一転、勉強のような話にかわってしまい、子どもたちは委縮してしまいましたが、子どもたちにもわかりやすいように言葉をかみ砕いて、絵や図などを用いて子ども達が少しでも興味や関心を持ってくれるように工夫して伝えました。

【2日間を振り返ろう】

子ども達が帰った後に、高校生と＋Eで2日間を振り返り、未来の自分にあてて手紙を書きました。高校生の2人は伝えることの難しさ、そして「環境」について子ども達に考えさせることの難しさを感じたようでした。高校生2人は環境に興味があったというわけではなかったようですが、企画に参加したことで、環境に対する意識を持ち始めてくれたのではないかと思います。また、環境教育を実際にしたという自信を持ってもらいたいです。子ども達も、今はまだ難しくても、成長したときに思い出して、環境に興味を持ってもらえたらこの企画は大成功だったといえると思います。

～つくるところのスタッフの方からのメッセージ～

「伝える絵本」は大成功だったと思います。子どもたちは高校生の読み聞かせを真剣に聞き、また絵本作りを楽しそうにしている姿に思わず顔がほころびました。何よりこの企画の斬新さに私は驚かされました。高校生から小学生へ「水」の話を伝えるという方法もさることながら、世代を越えた環境問題への興味喚起は今まさに社会が必要としている仕組みだと感じたからです。今後のエコプロジェクトの活動も楽しみにしています。

～＋Eの今年を振り返って～

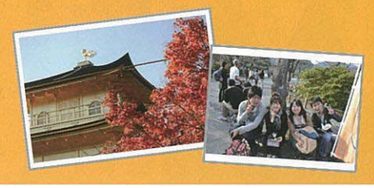
今年は、＋Eの掲げるミッションのもと、「＋Eにしかできないことは何なのか」を追及した1年でした。日頃から環境に感心のある大学生だからこそできることの一つとして、「人と人とをつなぎ、様々な人に環境に興味を持ってもらう」ということがあります。里山企画では、普段子どもと接する機会のない大学生と小学生を、絵本企画では、大学生、高校生そして小学生をつなぎ、共に考える機会をつくることができたのではないかと思います。小学生や高校生と共に環境について考えることで、私たち＋Eメンバーにとっては新たな発見がありました。その発見は、＋Eで活動していたからこそ得られたかけがえのないものです。

＋Eは、立ち上げ以来、数えるほどしか企画を行っておらず、まだまだ手探り状態です。そんな中で2010年にこのように二つの企画をやり遂げたということは、＋Eという個別プロジェクトにとっても、また、＋Eメンバーにとっても大きな成果となった年にちがいありません。

最後になりましたが、里山企画・絵本企画実施のためにお世話になったみなさま、本当にありがとうございました。

SUPER PHOTO RALLY Z

～留学生 × 写真 × 環境～



はじめに

DEPの国際部門であるGlobal Communication（以下GC）は、DEPの環境活動や世界の環境活動を送受信することによって、学生を中心とした様々な人々の環境意識・知識が向上する場を創出し、地球人口＝環境人口を目指すプロジェクトです。昨年までは環境に関する国際的な議論を中心に行ってきましたが今年は留学生と体を動かして環境活動を行いました。

〈企画概要〉

今年は11月21日に、京都で留学生を対象に環境フォトラリー、SuperPhotorally Z（以下SPZ）を行いました。この企画は、留学生の中でも環境意識の低い人たちに環境について考える機会をもってもらうという目的で考案されました。京都の観光地を舞台としてチーム毎に、その観光地特有のものはもちろん、清掃活動の様子、「自分たちの環境」というテーマなどで、様々な環境に関する写真を撮ることを指令として、達成した指令の数を競うというものでした。このように環境について考える機会を設けることで、少しでも環境に興味を持ってもらうことが狙いでした。この企画には、イタリア、オーストラリア、中国、韓国、ベトナムをはじめとする各国からの留学生28人とGCメンバー、そして当日スタッフとしてDEPメンバーが参加しました。

〈企画準備〉

GCのミッション・ビジョンに沿って考えた結果、留学生を巻き込んで企画を行うことが最初に決まりました。そして対象は環境問題に対してあまり関心を持っていない留学生とし、そういった留学生の環境意識を向上させることを企画目的にしました。

企画の対象である留学生の環境意識をどうしたら向上することができるのかが次の主な議題となりました。様々な意見が出た中、最終的に写真を通じて京都の自然や普段は気にならない身近な環境問題を気づいてもらうことにしました。そうしてSPZは生まれました。

そこからは企画の細かい部分を決め、実行していきました。留学生を集めるためビラを作成したり、自然や環境問題を留学生たちが毛嫌いすることなく関心を持ってもらうためのルールを考えました。

企画の直前にはDEPメンバーでリハーサルを行い、本番で起こりうるリスクを探し修正を加え、本番に臨みました。

〈企画当日〉

▼SPZスタート

11月21日の朝、一足早く来て準備した新町キャンパスの教室に、留学生がぞくぞくとやってきました。留学生は1～8の番号が書かれたくじを引き、留学生とDEPメンバー合わせて5人または6人のチームを作りました。1～8の番号に応じて最初に行く観光地、二条城、八坂神社、清水寺、嵐山、下鴨神社、東寺、金閣寺、銀閣寺を決めました。当日一緒に回るメンバーのもとに着席した留学生たちはDEPメンバーとコミュニケーションを取りながらこれからの企画を楽しみにしている様子でした。

留学生が全員集まり、いよいよSPZがスタートしました。企画説明、そして最初の目的地の発表をして、各チームが順々に最初の目的地へと出発していきました。

▼ルール説明

本部からの指令とカメラをもって最初の目的地に出発！

正解すると本部からアルファベットが1字送られてきます。このアルファベットを組み合わせて環境に関する単語を考えます。

指令の答えを見つけたらカメラで撮影し、その写真をメールで本部に送ります。

1つでも多くの単語が分かったチームの勝利です。

チーム報告

▼下鴨チーム

下鴨チームは、中国人留学生3人とDEPメンバー2人の5人で周りました。留学生は京都を観光することを主な目的としてこの企画に参加したようでした。始めに周った下鴨神社では、日本古来の文化と水や林などの自然環境の融合に感動しているようで、持参したカメラで多くの写真を取っていました。また、隣接する『糺の森』は想像以上に大きく、留学生と共に自然の雄大さに触れることができました。留学生と共に時間をかけて周る中で、留学生も環境についての考えや思いを話してくれるようになり、鴨川で留学生と共に『自分たちの環境』の写真を撮ることができました。留学生は身近でありながら、大切な水と京都の雰囲気から鴨川を選んだと話してくれました。DEPメンバーから留学生に対して、上手く環境について話をすることはできませんでしたが、留学生が楽しみながら環境について主体的に感じてくれたことは、この企画の大きな収穫であったように思います。

八坂神社チーム

八坂神社チームは台湾人の女の子2人、中国人の女の子1人、韓国人の女の子1人とDEPメンバー2人の計6人でした。留学生のみんなは環境よりも観光をメインに参加したとのことでした。しかし、留学生たちは知恩院→八坂神社→二条城と回る最初から最後まで指令を自ら積極的に探し、考え、「自分達の環境」の指令では二条城でのごみ箱を写真に収めました。私達との会話のなかでも、普段3人が考えることのなかった環境問題について考えるきっかけを与えることができたと思います。

特に3人とまわって印象的だったのは最後です。帰る時間に間に合わなければ減点ということで、急いで教室まで戻らなければならなかったのですが、京田辺校地にずっといる私達はバスを降りてから教室までの帰り方が詳しくありませんでした。しかし今出川キャンパスで授業を受けている留学生たちが私達に早い道を教えてくれ、そこまでみんなで一緒に走り、ぎりぎり時間に間に合いました。半日という短い時間でしたがみんなと一緒に企画を楽しんでいると感じる瞬間でした。

SPZ終了

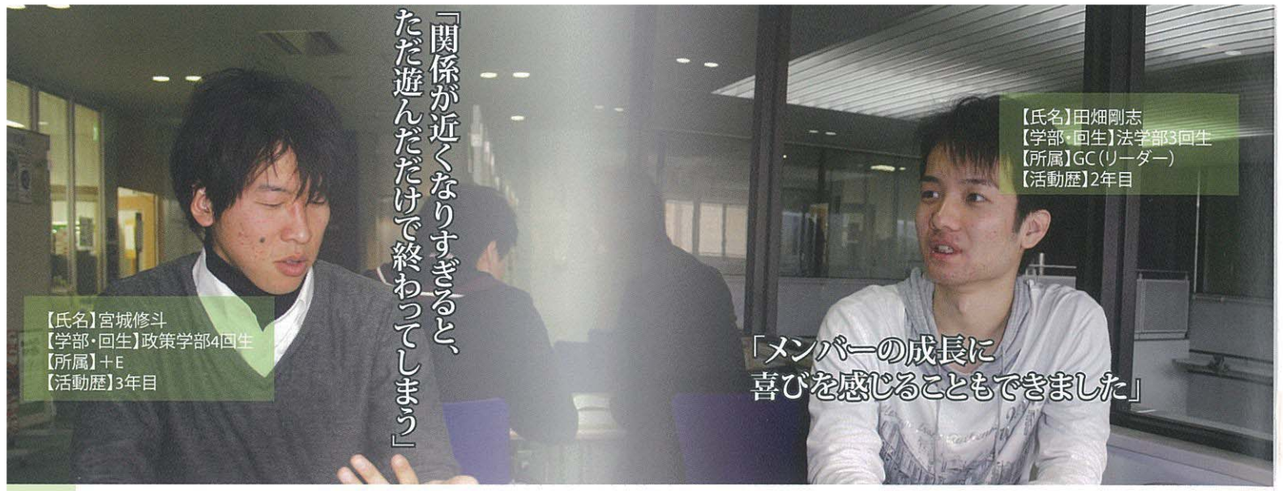
1チーム、1チーム最初の教室に帰ってきました。帰ってきた留学生・GC・DEPメンバーはチーム関係なくお互いの1日を写真を見せあい振り返っていました。結果は1位が八坂神社チーム、2位が下鴨神社チーム、3位が二条城チームでした。

企画が終わりしばらくして、GCメンバーは参加してくれた留学生に写真を添えたメッセージカードを配りました。

統括

今年の活動はGCにとって初めて尽くしの1年でした。留学生と一緒に活動するのも初めて、実際に街に出て環境活動をするのも初めて、環境意識の低い人に環境について伝えるのも初めてでした。新しくそして大きな第一歩でしたが、環境意識の低い留学生に環境について考えてもらうことの難しさや、文化や言語の壁を越えた仲間と活動することの難しさを痛感することになりました。

ですがこの経験は、環境啓発活動の在り方について全員が考えるよいきっかけになりました。このきっかけを次の活動に活かせば、より深みのある活動ができるのではないでしょうか。GCの目指す地球人口＝環境人口への道のりはまだ始まったばかり。これからも国際部門の名にふさわしいプロジェクトであり続けるべく、様々な人を巻き込んだ活動をしていきます。



メンバーインタビュー ＋E&GC編

「実際に企画の参加者と対面し、環境意識を啓発する」という共通点があるということで、＋EとGCのメンバーにインタビューを行いました。＋Eの宮城さんとGCの田畑さんが、この一年間の活動で何を考え、何を得たのか聞いてみました。

—今年一年の活動を終えて、今の自分に大きな影響を与えているって感じることは？

宮城：こどもを目の前にして、難しい言葉をかみ砕く難しさを感じたことですね。こどもにグローバルな話をしたり、概念を言葉で説明したりしても、キョトンとしてしまうんです。こどもにとって、環境を身近に感じることと、五感を使うことが大切だって思うようになりました。

—参加者に対して気をつけたことや、接してみて難しかったことはありますか？

田畑：SPZでは、留学生がDEPに対して一緒にいて楽しい団体っていう印象を持つように意識しました。環境について考えてもらう一番良い方法を考えたとき、それは環境に対して真剣に考えている友達をもつことなんじゃないかっていう考えにたどりついたんです。だから、まずは仲良くなって、話を聞いてもらえる関係づくりを大切にしようって。

宮城：＋Eで意識しているのは、仲良くするところと真剣さを見せるところの切り替えをしっかりして、こどもたちとちょうどいい距離を保つことです。初対面のこどもたちとまず仲良くなるのはもちろん大切なんですが、関係が近くなりすぎると、ただ遊んだだけで終わってしまうので。

—参加者がいることは同じでも、相手にする年齢が違うことで、意識することが変わる部分ってありますか？

田畑：宮城さんの話を聞いてて、環境についての伝え方はあまり変わらないんじゃないかって思いました。さっき、仲良くならないと話を聞いてもらえないと言いましたが、やっぱり相手が大学生でも、相手に合わせようとしすぎて、のみ込まれないように注意しなくてはいけません。フォトラリーの企画は、「観光」と「環境」を組み合わせたものでしたが、観光目的で来た参加者の要望にこたえようとしすぎると、ただ観光するだけで終わってしまうなって思いました。

—それでは最後に、DEPで得たことを今後どう生かそうと思っているか教えて下さい。

宮城：大学を卒業したら、教員になることを目指しています！今も小学校に行かせてもらう機会があるのですが、＋Eでこどもたちや小学校の先生、「つくるところ」の職員さんといったいろんな年代の人と関わったことや、いろいろなタイプの教育を見てきたことが活かされているなって、すでに感じています。始めに話したように、環境教育において何が大事なのかっていうことも自分なりに持てているので、総合的な学習の時間なんかに生きてくると思っています。

あと、DEPは人前で話す機会が多い団体なので、日常的に人前で話す教員の仕事に役立つことは多いと思います。どんな立ち振る舞いをしたら良いのかとか、順序立てて話したりゆっくり話したりすると相手に伝わるっていうことも、DEPで学べたことですね。

田畑：今年初めてリーダーをした経験が今後に活かせると思っています。DEPって大学から資金の援助を受けて活動しているので、大学側の考えとメンバーがやりたいって思っていることがあって、食い違うこともあったんです。リーダーとしてその間に立ったとき、どう判断するかとか双方にどう伝えるかっていう難しさを感じました。自分がやりたいことや、自分がやりきることを一番に考えていた去年に比べると、そこで学んだことは多いと思いますね。メンバーの取り組み方に目を向けた時間が多いぶん、メンバーの成長に喜びを感じることもできました。4回生になる来年度は、リーダーのサポートができたらいいと思っています。アドバイスもするし、ダメなことはダメって言えるような存在に。

啓発する相手に接するときも、一つの目標に向かってメンバーと活動するときも、コミュニケーションが大事だということが見えてきました。それは当たり前のことですが、実際に相手と会ってみて、自分が動いてみて、実感したときに、やっと本当に自分の力となるはずです。

新プロジェクト誕生!!

エココロ推進部びびび

駆け出しの一年間

広報からエココロ推進部びびへ

昨年度まで広報という名前で活動していたプロジェクトを改名し、新たにビジョンとミッションを掲げて新しくなったのが、エココロ推進部びびびです。今までの広報は、ビジョンもミッションもなく、年間報告書とエコマガジンでつぶつぶの作成を活動としていましたが、メンバーが増えたことによりもっと活動の幅を広げられるのではないかと感じたことが背景にあります。そのビジョンとミッションは、次のように決めました。

●ビジョン

『環境意識の高い大学と言えば同志社大学！同志社大学と言えばDEP！同志社大学の学生がそう意識することはもちろん、世間一般の方々にもそう認知してもらう』

●ミッション

『DEPに関する広報活動や環境意識の啓発を行い、受け手の心に残るものを創る。それらの活動を通して、受け手に物事を伝えるノウハウを学ぶ。』

今年度は、「でつぷつぷ vol.7」の発行と年間報告書の作成を行ったことに加え、学内の啓発活動として、N-up&両面印刷の普及活動を行いました。

他にも、一部のメンバーで広報をテーマにした全体会を企画したり、イラストレーターの勉強会を行ったりしました。

でつぷつぷ vol.7

【でつぷつぷとは】

でつぷつぷは、どんな学生にも親しみやすいエコマガジンを目指し、学生が何気なく環境について考える機会をつくるために作成しています。大きさはA5サイズで、全8ページで構成されています。基本的に同志社大学の学生を対象にしており、誰もが手にとれるよう学内の特定の場所に設置しています。

また、メンバーは、作成を通して知識を増やしたり、文章を書く力や見やすいデザインを考える力をつけたりしています。

【作成・発行】

今年度は7月に vol.7 を発行しました。

～作成の流れ～

- テーマ決定
- ページ割と担当者の決定
- 記事集め・執筆・レイアウトの考案
- イラストレーターを使って各誌面の作成
- 校正と修正を3回
- 大学の事務局のチェック
- 業者さんとの打ち合わせ
- 校了
- 納品
- 両校地にて手配りと学内設置

Vol.7 のテーマは「エコとデート」でした。内容は、エコなポイントを盛り込んだ4つのデートプランを提案するというもので、イベント情報、お店やお寺、レシピなどを紹介しています。また、京田辺校地の食堂やローム記念館でエコなデートにまつわるアンケートを実施し、その結果を載せました。これには、読者の意見が載っていれば、読みたいという気持ちになるのではないかというねらいがあります。最後の2ページには、毎号恒例のコラムとイラストロジックを載せました。

自分たちで、文章とデザインの校正を3回以上繰り返した後、大学の事務局にチェックしてもらい、データを仕上げました。印刷はサンケイデザインという印刷業者にお願いし、7月末に完成しました。

完成後には、授業の間の休み時間や昼休みを利用し、食堂や校門に立って自分たちの手で配布しました。

学内に設置したものについては、どこで、どれくらいの部数を手に取ってもらえているのか調査を行い、適切な設置場所と部数を検討しました。

これからは、もっと多くの人の手に取ってもらえるよう、学内での認知度を上げる対策をとる必要を感じています。また、内容についても、もっと自分たちの主張を入れるなどして、びびび独自の色を強めたいと考えています。

【でつぷつぷ設置場所一覧】

京田辺	今出川
J ohermi	図書館
紫苑館食堂	明徳館食堂
Hamac de Paradis Latte	新町食堂
ローム記念館	新町ショップ
教務課	寒梅館
別館	臨光館
京田辺 Cafeteria	書籍部
Davis Café	明徳館ラウンジ
図書館	

N-up&両面印刷普及活動

〈企画概要〉

プロジェクトの改名、ビジョン・ミッションの設定後、びびびにとって初めての学生に向けた啓発活動として、N-up&両面印刷の普及活動を行いました。目指したのは、同志社大学の学生全員がN-up&両面印刷を知っていて、積極的に取り入れているという状態にし、紙資源の無駄を削減することです。N-up&両面印刷は、紙資源の無駄を削減できるというメリットに加え、印刷代の節約や資料のコンパクト化など、環境以外の視点でもメリットがあるため、学生の間で普及しやすいのではないかと期待して取り組みました。

～企画実施までの流れ～

- 企画書作成
- 情報支援課の方と打ち合わせ
- 施設課と立て看板設置の交渉
- 事前アンケートの実施
- 立て看板の設置
- 三角のポップ設置
- 事後アンケートの実施

〈企画準備・実施〉

どのようにしてN-up&両面印刷の方法とそのメリットを学生に知ってもらうか、両校地の図書館や情報メディア館といったパソコンコーナーがある施設の職員さんや、施設課の職員さんと何度もお話をしました。最終的に、授業教室と図書館以外のパソコンコーナーに操作方法とメリットを書いた三角のポップを設置する方法に決まりました。また、三角のポップの存在を知ってもらうために、強化週間を設けて情報メディア館の入り口に立て看板も設置しました。

三角のポップは、学生の目に止まるように、記載する内容やそのデザインについて話し合い、何度も校正を重ねて完成しました。強化週間は3週間とし、パソコンの利用が増えるテスト期間に設定しました。

三角のポップと立て看板の効果をチェックするために、設置前後でアンケートも実施しました。このアンケートには、事前に情報メディア館の職員さんに教えて頂いた使用される紙の量も記載し、アンケートに答えることで、学内の現状を知ってもらうという工夫も凝らしました。アンケートでN-up&両面印刷の方法を知らないと答えた人には、アンケート回収と引き換えにその方法を説明した小さなリーフレットを配布しました。

アンケートでは、三角のポップや立て看板に気付いた人は少ないという結果がでましたが、メリットとして、紙資源の無駄削減を重要視してくれる人が多いということもわかりました。

びびびのこれから

今年度は、ミッションとビジョンを設定するために、今までの活動の見直しに多くの時間を費やしました。そして、広がった活動範囲の中で1つの企画を実施することで、プロジェクトの土台作りに力を入れました。N-up&両面印刷の普及活動では、その第一歩を踏み出すことができたと思います。

しかし、マガジンや立て看板といった方法では、なかなか学生に注目してもらえないというもどかしさを感じたのも事実です。活動を終えて、今後はもっと自分たちの伝えたいことに学生が振り向いてくれるような工夫を追求し、実践を通してその効力を確かめていく必要を感じました。また、自分たち自身が学内のことにアンテナを張って、学生に提供できる情報がないか、提案できることはないかと、積極的に探す努力も必要だと感じました。

学生に自分たちの思いを伝えるアイテムとしてでつぷつぷを活用することはもちろん、もっといろいろな方法で、学生の環境意識を啓発し、DEPが学内で注目されるような活動を展開していきたいと思います。

あすみチャンネル contribution

今年度のあすみチャンネル

あすみチャンネルは京田辺から全国へ環境意識の改革を行い、環境に配慮することが当たり前の社会を目ざしています。そのためには、DEPの活動から見える「環境」をテーマにした映像コンテンツを創出・発信し、視聴者の環境に対する意識を高め、行動を促していく組織です。

今年度のあすみチャンネルは、映像コンテンツを創出するだけでは留まらず、それを独自で発信していくということに注力しました。主体的に映像制作を行うことによって、私たちが望むような効果測定を目指し、より視聴者目線の番組作りを提案しました。

その中で、私たちは「不特定多数」に向けて、映像コンテンツという方法で環境意識の改革を行っています。視聴者に視覚や聴覚による刺激を与え、より多くの方々に環境活動を啓発しています。その方法の一つとしてあすみチャンネルは映像コンテンツの創出を実践しています。

あすみチャンネルは、その方法として独自イベントの開催や、ケーブルテレビへのCM持ち込み、また自主WEBサイトによるアップロードなどを試みました。

〈企画概要〉

あすみチャンネルは今年度の前半、大学生に環境活動に興味を持ってもらい、実際に実行してもらうという目標を立てて、番組制作とその上映会を開催しました。番組はテーマを「大学生の環境活動」と設定し、環境活動をしている学生に焦点を当てた内容になっています。また上映会は、ターゲットである大学生に視聴して貰うために、同志社大学にて開催しました。

【上映会について】

●タイトル

Let's エコキャンパスライフ

～自分の可能性を広げよう～

●日時・場所

2010年7月1～2日 15～19時

@ローム記念館2階オープンスペース

●内容

・番組上映

・パネル展示（里山・生物多様性・環境活動を行っている団体へのインタビュー）など

〈企画準備〉

【番組制作】

「環境活動ってなんだろう?自分は、チームに何が貢献できるのだろう?」

あすみチャンネルはこの2つの問いの答えを見つけるために、同志社エコプロジェクト内の他プロジェクトである＋Eの活動を基に約15分のドキュメンタリー番組の制作を行いました。

あすみチャンネルは＋Eの企画したイベントである「Let's go to 里山。学ぼうエコ博士への第一歩」（P15～P16ページ参考）が立ち上がる瞬間から取材を開始し、メンバー総動員による構成、撮影、取材、編集などを行いました。大まかな構成や番組の流れを会議で決定し、それに従うような映像を撮影していきます。そのためには、里山の下調べや出演者へのアポ取りなどが必要でした。そこで、事前の準備をしっかりとすることで以降の制作活動をスムーズにしていきました。

また、ドキュメンタリー番組らしい「あすみチャンネル独自の主観・切り口」を持って映像制作をしました。その切り口とは、出演者が環境活動を通して、自分は環境にどうやって貢献できるのだろうと考えるというものです。それを知るために、出演者一人ひとりにインタビュー撮影を行い、その映像を駆使して番組を仕上げていきました。また講習会を通じて、大型カメラの扱い方、また映像編集ソフトの使い方を学ぶなど、映像をより良いものにする為に技術を磨いていきました。

このようにして、自分達の思いが伝わるように、また上映会に間に合うように日夜映像制作に明け暮れました。

【上映会準備】

上映会の開催に向けて様々な準備を行いました。上映会の内容は、里山番組の上映の他に、パネル展示、写真の展示、＋Eで使われたポスター等の展示、そして撮影参加者からの一言メッセージに決定しました。あすみチャンネルは初めにパネル制作に取り掛かりました。パネルの内容はDEPの概要、他大学の環境活動、生物多様性、里山など多くの知識を補うものとして作成されました。他大学の環境活動は京都府立大学の環境サークルである『エコプロジェクト』に協力して頂きました。

【ビラ作成】

パネル制作と同様に、ポスター・チラシの製作も行いました。今回の上映会のタイトルをあすみチャンネルメンバーで考えていく上で、より多くの方に参加していただけるような印象に残るタイトルになるように心がけました。その結果、タイトルは「大学生×環境活動＝無限大 Let's エコキャンパスライフ～自分の可能性を広げよう～」に決定しました。これには環境活動から自分の可能性が発見できる、という意味が込められています。

【多様な広報】

多くの学生に上映会を知ってもらうために、ビラによる広報だけでなくその他多くの広報方法にも力を入れました。具体的には、ポスターを立て看板に掲示することや番組紹介VTRを劇場空間のスクリーンに放映すること、大学のホームページに番組の告知をすることです。

【装飾について】

上映会開催前日には、会場の装飾に取り掛かりました。会場の全体装飾は、風船、バルーンアート、モールを用いて可愛らしい空間となりました。その他にも、コーナー看板や写真のコラージュも行い、上映会当日に備えました。

〈上映会本番〉

同志社ローム記念館2階にあるオープンスペースを貸し切って開催する上映会では、あすみチャンネルのメンバーが直前まで来場者の動きの確認や掲示物のチェックなどを行いました。

最初に動き出したのは外部広報班です。授業が終わり、続々と教室から出てくる学生に声をかけ、プラカードを持って上映会に勧誘しました。学生が、今回の番組のテーマである「環境教育」という言葉に馴染みがないという事もあり苦戦しましたが、初めて聞く言葉に興味を示してくれる学生もいました。

そして上映開始時間になり、上映会が始まりました。今回の番組は、約40分というあすみチャンネル史上最長の番組です。大学関係者の方も数名来てくださり、パネル展示や番組などを鑑賞されました。上映会終了後は、メンバーが直接来場者の元へ行き、アンケートに記入してもらうと同時に環境に対しての意識調査も含め、パネルの説明などを熱心に行っていました。初日の来客数は18名という期待していた数字には到底及ばない結果でした。

上映会2日目。前日の反省を生かし広報戦略を練り直し、お昼休みや空き時間を使っての宣伝活動や、DEPメンバーや友人を通しての口コミ広報を行いました。また、上映時間を2回から3回に増やすなど、より多くの学生が来ることができるように工夫しました。来場者は31名。今後の活動に課題を残す結果となりました。

〈番組概要〉

●タイトル

Contribution

●時間

40分

●内容

同志社エコプロジェクトの環境教育チーム『＋E』は今年の5月15日、同志社大学裏の里山で自然とふれあうことによって子ども達の環境への関心を高め、周りの人にも自然の素晴らしさを広めてもらうことを目標に、ある環境活動を行いました。あすみチャンネルは、その活動の準備段階からリハーサル、本番までの一連の流れを追いかけました。＋Eメンバーの企画立案に対する動向や、運営をしていく上での苦労や問題、企画本番から企画反省までを、メンバー一人ひとりに焦点を当てて取り上げています。

あすみワールド
in クローバー祭

〈企画概要〉

本企画は、同志社大学京田辺祭「クローバー祭（前アダム祭）」に出展したものであり、ローム記念館プロジェクトの活動の一つです。環境問題に対するいろいろな取り組み方がある事を知り、様々な形で体感してもらうことで、地域の人に「自分のエコ」を見つけてもらい、継続的に実行していってもらうことを目的として活動しました。春学期に行った上映会イベントの反省を活かし行われたものであり、今年度のあすみチャンネルの活動において最も大きなイベントとなりました。

【イベントについて】

●日時・場所
10月30日（土）・31日（日）10時～17時
@ローム記念館グランドフロア

●ブース概要
「私のエコ」を全体のテーマに、ブースは大きく4つに分け、来客の動線を明確にすることであすみワールドとして一つの流れを示しました。

しぜんブース
秋の里山を再現し、子供たちに草花遊びや草を使った創作物を体験してもらいました。

My エコブース
メンバーの「My エコ」である「海ごみ」「水」「物」をテーマにして、それぞれ紹介しました。

スタジオブース
ブースをまわった来場者の方に、エコ宣言として一言メッセージの撮影をしました。
また、DEPのOB・OGの方々が書いたパネルを見てもらい、来場者に対して自分にとってのエコを考えてもらいました。

上映会ブース
春学期制作した＋E密着番組「里山」の上映を随時行いました。

〈企画準備〉

今回は、あすみワールド全体を一つの世界として、一体感を持たせることを考えながら個別ブースの企画や準備を進めていきました。ブース担当ごとに班分けし、訪れた人にどのようにMy エコを発見してもらうかということを重視しながら定期的な話し合いを行いました。

【しぜんブース準備】

しぜんブースでは、身近な自然に関心を持ってほしいという思いでブースを準備しました。しぜんブースの担当メンバーで定期的に会議を行い、自分達の方向性を確かめながら準備を進めていきました。草花遊び（オナモミのダーツ、ドングリの駒、落ち葉を使ったメッセージカード作り）で使う草花は大学周辺で採集しました。

【My エコブース準備】

My エコブースでは、あすみメンバーが普段から実践しているMy エコを紹介する為に、映像（各2～3分）を撮り、パネルを作成し、その中にクイズを盛り込むなどして分かりやすく理解してもらうことを心がけました。

【スタジオブース準備】

スタジオブースでは、あすみワールドで見つけたMy エコを発表してもらうために、カメラの前で来場者がそれぞれ見つけたMy エコを発表してもらえるようにしました。その背景となるボードには模造紙を貼り、来場者のMy エコを書いてもらうようにしました。またDEPのOB・OGの方々に書いてもらった「私のエコ」をテーマにした文章を見てもらい、大人の来場者にも自分にとってのエコを考えてもらえるようにしました。

【外部への広報準備】

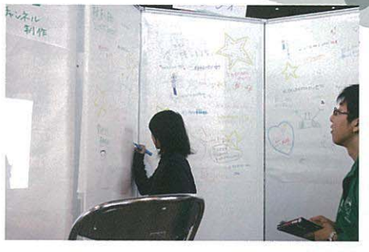
7月の上映会で広報が徹底できていなかったことを反省し、クローバー祭では外部への広報に注力しました。今回は京田辺に住む子供達を対象としたイベントなので、新田辺駅周辺やきらら商店街などにイベント告知のビラを配布しました。

〈企画当日〉

前日まで台風が接近し開催が危ぶまれましたが、当日は晴れ二日間で総計335人が来場しました。入り口横という目につきやすい所に出展できたこともあり、親子連れの来場者が多く来てくれました。

会場の配置は、来場者がしぜんブース、My エコブース、（上映会ブース）、スタジオブースの順にまわるように設定しました。しかし、しぜんブースでの体験に時間がかかるなど、一つのブースに人が集まってしまう傾向がありました。そこで、二日目はメンバーが積極的に次のブースへ誘導を行うなどの改善策を取り、あすみワールド内にまんべんなく人が行きわたるようにしました。また、アンケートに答えてくれた方にお菓子を配ったり、奄美大島への災害復興応援メッセージのコーナーを設けたりするなど、その他いくつかの変更点がありました。当初予想したよりも来場者の年齢層が低く、ブースの内容が難しいという場面も見受けられました。事前調査として対象年齢の設定が甘かったことが要因としてあげられます。

参加者からは、「また来たい」「どんぐりの駒や風呂敷バックなどを家でも実践してみたい」という反響を得ることができました。また、保護者の方にも、子供がしぜんブースやMy エコブースで遊んでいる間、上映会ブースやOB・OGの「私のエコ」パネルを見て、My エコについて深く考えてもらえました。当日調査したアンケートを見ると、あすみワールドを知った理由として、「駅周辺のポスターを見たから」という声もあり、事前広報の成果が見られました。



CM企画

【はじめに】

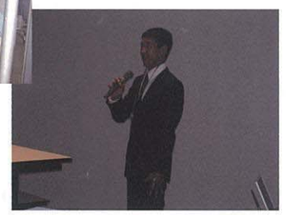
あすみチャンネルはクローバー祭での活動を終え、事後調査に向けて動き出しました。その手段としてCMを制作しました。CMからあすみチャンネルのWEBサイトに呼びこむことで、視聴者との交流の場を設け、リアルな声をフィードバックしていくことを目的としました。さらに、今後のあすみチャンネルの活動を認知してもらうための役割も担っています。

【2つのCM制作】

各メンバーがそれぞれCMの企画書を提出しました。その中で、メンバーが選抜し、2つのCM企画案を決定しました。まず1つ目は『省エネ推進を図るCM』です。映像の中で省エネに関する疑問を視聴者に投げかけることで興味を誘い、WEBサイトへ呼びこむという狙いがあります。2つ目は、『エンドロール』と銘打ったCMです。このCMの目的は視聴者の環境意識の定着を図ることと、あすみチャンネルの知名度向上です。CMの内容は、映画のエンドロールをパロディ化したもので、そのエンドロールには地球上で生息した全ての生き物が流れてくるといったインパクトがある映像です。この映像では、視聴者の環境破壊への危機意識を増大させることを狙いとしています。

【最後に】

どちらのCMも、視聴者に環境問題を意識し行動してもらうだけでなく、あすみチャンネルの知名度向上にもつながるものに仕上がりました。現在、このCMを多くの人々に見てもらい、環境問題に関心を持ってもらえるように活動中です。



挑戦した一年を振り返って

あすみチャンネルは、今年度から主体的な番組制作を行い、視聴者に環境活動を啓発することを目的としてきました。制作した番組はあすみ史上最も長編のものでドキュメンタリー番組という難度の高いものに挑戦しました。そして、制作された番組の発信の場を作るために新たな要素である「広報活動」が加わりました。独自イベントの運営や企業へのCM売り込みに関わる広報などを行って来ました。残念ながら、目標に掲げたような具体的な成果が得られず、また方法を上手く形にできなかったなど、戸惑う事や大変な事がたくさんありました。しかし、あすみチャンネルが主体的にイベントを開催することで参加者の反応を直接感じることが出来ました。今年度の反省をこれからの活動に活かし、より多くの方々に環境活動の啓発ができるように活動していきたいです。また、大きな目標を達成するために、様々な新しいことにもチャレンジしていきたいと思います。

メンバーインタビュー

あすみチャンネル＆エココロ推進部びびび編

【氏名】濱田 陽平
【学部・回生】経済学部3回生
【所属】あすみチャンネル（リーダー）
【活動歴】3年目

「今年を一言でいうと
“はじまる”か“ふたたび”ですかね」

【氏名】栗原 和音
【学部・回生】理工学部2回生
【所属】エココロ推進部びびび（リーダー）
【活動歴】2年目

『失敗するとかじゃなくて、
やってみることが大事』

あすみチャンネルとエココロ推進部びびびには、2つの共通点があります。1つはメディアを通じて環境啓発をするプロジェクトであること、もう1つは本年度から新しい体制になって再スタートを切ったということです。その中で感じたことを、リーダーを務めた濱田くんと栗原さんに伺ってみました。

―この一年間で大きな影響を受けたことはなんですか？

濱田：去年とは体制が変わって、自分がリーダーとして、新メンバーとともに新しいあすみチャンネルを創ることなりました。そこで、目的意識やモチベーションのUPなど細心の注意をはらっていました。去年まではそこが弱かったので、本当に耳にタコができるくらいに呼びかけて、そうすると、メンバーも答えてくれて、一体感も生まれてきましたね。

栗原：今年から設立して、MissionとVisionを作っているときに、その話も大事だけど、その話しだけだと抽象的になってしまい、メンバーはすごく困ってしまっていました。

そこで、いろんな人に相談しながら、出した結論はまずやってみようということです。すると、その1つをやる中で、それぞれが自分の見てるものや考え方をつかむことができました。失敗するとかじゃなくて、やってみることが大事だと感じました。

―新しい取り組みをする上で、特に意識したことは？

濱田：あすみチャンネルでは、今年から、学生だけで運営することになり、自分たちで管理する必要がありました。そこで、目的意識に一番注意していきました。例えば、番組の構成を考える上で、言いたいことがわからない、伝えたい相手がわからないようではダメなので、そこにすぐに立ち返るようにしました。

栗原：話し合うだけでなく、動くことです。また、これはこれからの課題ですが、広報物を創ることに興味があるメンバーが多かったので、創るだけで終わってしまい、中身や配布の仕方に意識がいってないってことが課題にあがりました。

濱田：確かに創るだけで完結してしまうんですよね。創るだけでも楽しいから。でも逆に本末転倒になってしまうのがコワいんです。

栗原：対象がいろいろなので、誰に読んでもらうか、どんな状況かわからない。それを意識していないとすぐにおかしくなってしまうんです。環境ガッツリな内容でも読者は手に取りにくくなるし、軽くすると作り手には新しい発見もないし、創り甲斐がなくなり、モチベーションも低下してしまうんです。

―それぞれの活動を通して、伝えたい「環境」とは何ですか？？

濱田：やっぱり経験からくるものだと思います。

今年のクローバー祭で「私のエコ」という企画をして、見つめ直したんですけど、海が最初だったと思いました。近所の大阪湾にたくさんあるごみが多いし、すごく気になっていました。それからは今は、大学やDEPで学ぶ中でいろいろ増えました。

栗原：DEPに入る前は、環境問題を何とかしたい、エアコンをつける人は悪だと思っていました。でも、DEPに入ってから、逆に軟化して、みんなに押し付ける必要もなくて、そうじゃない人にも気軽に受け入れられるようなアプローチが必要かなと思いました。

―今年一年で学んだことをどう生かしますか？

濱田：視聴者から返答をもらうってところを強化していきたいと思います。個人としては本当に原点回帰や目的意識ってものが大事だと思いました。どこを向いているかってことが大事やし、これはプロジェクトだけでもなく、人生でも大事だと感じました。今年を一言でいうと「はじまる」か「ふたたび」ですかね？もっと、これを発展させるのが来年かなと思っています。

栗原：感じたことは、全部自分でやろうと思ってたけど、それは難しいなって感じましたね。だから、もっと上手くやってる人や専門家から学んだりすること大事だなって感じました。

共通点も多い2つのプロジェクトですが、そこで感じたことには違いもあったようです。その一方で、お互いに受け手の反応や態度に関しての課題の意見交換や作り手としてのこだわりから来る苦労など、今後の課題については、まだまだ多く、まだまだこれから、という意気込みが見え隠れしていました。

第２回
環境学生討論会

外部イベント総括

ＤＥＰのメンバーは今年も視野を広げ、ローカルからグローバルまで、外部の多様な活動に参加しました。複数の大学と共に、農山村に対して政策提言を行った「第２回環境学生討論会」、11月末に同志社大学で開催される「同志社ＥＶＥ」での環境活動、ＤＥＰが第１回を主催し、世界の環境に関心のある学生が環境問題解決に向けて議論した「世界環境学生サミットｉｎチュービンゲン（ＷＳＥＳ）」、メキシコのカンクンで開催された「気候変動枠組条約第１６回締約国会議（ＵＮＦＣＣＣ－ＣＯＰ16）」。

このページからは、外部イベントに関して詳しく報告します。

第２回環境学生討論会とは

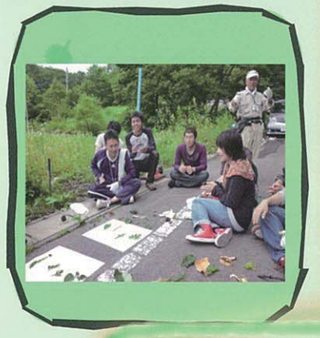
生き生きとした学生の集い

環境学生討論会とは、私たちの周りにある様々な環境問題について、複数の大学間で討論し、その解決策を社会に対して発信するという企画です。第２回環境学生討論会では、自然豊かな日本の農山村の荒廃を問題視し、代表的な農山村である群馬県の嬬恋村に対して「環境に配慮した持続可能なまちづくり」を実現するための政策プランを提言しました。私たちＤＥＰは、前回に引き続きこの討論会に参加し、早稲田大学、慶應義塾大学、東京大学などの学生と共に、討論を重ねました。

活動の流れ

〈6月～7月末 日本の農山村研究〉

嬬恋村に向けて提言する政策プランを作成する上で、まず取りかかったことは、嬬恋村を含めた農山村の課題を明確にすることです。そのためには、日本の農業や地方の地域社会についての知識が必要だということで、日本の農山村の研究を行いました。農山村で増加しているといわれる「耕作放棄地問題」や、地域社会で深刻な「人口減少問題」、地域政策の１つ「地産地消」や、「産業・福祉・教育など諸制度に関する「農山村の持つ多面的な機能」についての文献や統計をもとに研究しました。嬬恋村についても、村役場が公表する『嬬恋村統計データ』を参照し、そのほかの日本の農山村と比較しながら分析しました。ＤＥＰのメンバーも、この研究のためにおよそ２カ月、様々な文献を読み込み、多くの知識を蓄えました。



〈8月 フィールドワーク調査〉

ただ、文献や資料だけでは分からない農山村の現状もあります。わたしたちは、文献では分からない、目で見た村の現状を把握するために、計２回、実際に嬬恋村へ行きフィールドワーク調査を実施しました。１回目のフィールドワークでは、地元のＮＰＯの方々の案内で、村の観光地訪問や農業体験を行いました。また、現在の嬬恋村についてのお話も伺いました。２回目のフィールドワークでは、１回目のフィールドワークでは分からなかった地元住民の方々の生の声を知るために、住民対象のアンケート調査を実施して、多くの地元住民の方々と対話をしました。ＤＥＰメンバーもアンケート調査用紙の作成や地域住民の方々との意見交換をするなど、積極的にフィールドワーク調査に関わりました。

〈8月末～10月末 政策プランの立案と作成〉

農山村の研究や２回の実地調査をもとに、嬬恋村の抱える課題を解決するための政策プランを２つのチームに分かれて作成しました。嬬恋村の課題を解決するために何ができるのか、嬬恋村にある豊かな自然をどのように生かすことができるか、全メンバーが毎週のように討論を重ねて、「環境に配慮した持続可能なまちづくり」を実現するための政策プランを完成させました。

政策プラン

『ふるさと納税の有効活用による環境プロジェクトの積極的な導入案』

「チームまる」では嬬恋村の持つ村の魅力を存分に生かした『ふるさと納税の有効活用による環境プロジェクトの積極的な導入案』を提案しました。「ふるさと納税」とは、全国から誰でも自分の好きな地方自治体に納税し、資金提供ができるという国の新たな政策です。

現在、一部の地方自治体ではその村の魅力を外部にアピールすることや、納税された場合の資金の使い道を明示することで多くの「ふるさと納税」を集めて、魅力的なまちづくりを行っています。嬬恋村の豊かな自然は外部の人にとっても十分魅力的なものなので、その魅力を存分に生かし、「ふるさと納税」を有効活用する政策を考案しました。具体的には、ホームページやＳＮＳを使って村の魅力である豊かな自然を外部に向けて広報することで嬬恋への納税者を集め、その資金の使い道として、豊かな自然を守るための環境保全活動や環境教育、地熱・小水力発電などの環境プロジェクトを推進するというものです。

自然豊かな農山村の自然の魅力を存分に生かし、資金集めや環境政策を外部の人々と共に実現する、地域の垣根を越えた政策プランです。

『Ｆ－１グランプリ開催による行政・住民一体となった郷土愛教育案』

「チームＴＯＮＯ」では、少子化をはじめとする人口減少問題を村の一番の課題と考え、その課題を解決するために、身の回りにある豊かな自然環境を生かした郷土愛教育『Ｆ－１グランプリ』を提案しました。自然をきっかけにした郷土愛教育の推進は、若者の流出防止や多様な教育機会の提供による子育て支援につながり、少子化対策になると考えたからです。

『Ｆ－１グランプリ』とは、嬬恋村とその周辺地域のこどもたちが「ふるさとの環境」の良いところを自慢し合うこども村自慢コンテストで、「ふるさとの環境」をテーマに自分たちの村の自然環境について考え直すきっかけを作る環境教育プログラムです。ふるさとの村自慢を外部に向けて発信することで、こどもたちの意識の中に郷土愛を定着させることを狙いとしています。コンテストは、行政と住民とが協力して毎年実施するのですが、発表準備の過程で多世代の村民が関わりながら村自慢を探すことで、こどもたちだけでなく大人たちにもふるさとを見つめ直す機会を作ります。

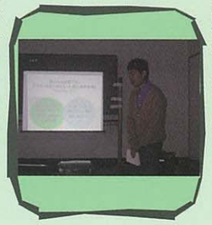
Ｆ－１グランプリを通して、こどもも大人も村民みんなに、改めて**「ふるさとの豊かな自然環境をきっかけに地元を好きになってほしい」**。そんな願いが込められた政策プランです。

※Ｆ－１グランプリのＦは、Furusato（ふるさと）Favorite（お気に入り）Find（見つける）に由来します。

嬬恋村の政策提言

日時：10月31日
場所：嬬恋村

●村長さんへ政策プランの発表
完成した政策プランは、10月31日に嬬恋村村長熊川栄さんの前で学生代表が発表しました。



●政策プランの提出
村長や地元のＮＰＯの方々と政策プランの詳細に関する討議をした後に、２つの政策プランを嬬恋村の行政へ提出しました。

●２つの政策プランに対する熊川村長のコメント
熊川村長から学生に対して、２つの政策プランへの賞讃のコメントをいただきました。

・チームまるへ：
「よくぞここまで短期間で勉強してきた」
・チームＴＯＮＯへ：
「僕らじゃ到底思いつかない、学生らしい柔軟な発想」

・政策実現に向けて大きな一歩

嬬恋村での発表も終え、メンバーそれぞれが新たな活動に向けて動き出したころ、嬬恋村から嬉しいお知らせが届きました。

チームＴＯＮＯが提案した政策プラン『Ｆ－１グランプリ開催による行政・住民一体となった郷土愛教育案』が嬬恋村で議論され、実現に向けて国に対して予算を申請中とのお知らせでした。

それは、討論会のメンバーが５ヶ月間、時にはすれ違いながらも良いプランにするために全力で頑張ってきた努力が結実した瞬間でした。

・その他の関連活動

●両政策プランをeco japan cup ２０１０の「ポリシー部門」に応募
●国民の声にて両政策プランを内閣府へ提案
●ＤＥＰ11月期全体会開催
●エココン２０１０参加（予選グループ、７チーム中２位で敗退）

第２回環境学生討論会

討論会を終えて

「学生の大きな可能性×社会貢献」

今回、第２回環境学生討論会に参加したことは、ＤＥＰにとって本当に大きな財産となりました。なによりも学生だけで「農山村への政策提言を事実上成功させた」という経験は、参加者に大きな自信を与えたと思います。ＤＥＰでは、引き続き様々な環境活動を行いますが、学生の持つ大きな可能性を生かし、同志社大学内や社会に対して少しでも貢献をしていきたいと思います。

主催大学からのコメント

討論会の素晴らしい特徴は「学生が社会に発信すること」と「環境問題の解決を志す学生のネットワークの形成」です。ここが今の日本の環境サークルに足りません。その中で討論会を通して、メンバーに社会発信への意識の高まりが見られたこと、特に同志社と早稲田の環境サークルの結びつきが強固になったことは大きな成果です。

今後はこれを活かして、一緒に日本の大学生による環境活動を、より盛り上げていきましょう。

EVE活動

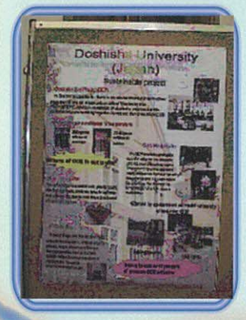
ＤＥＰでは、２００９年度より同志社ＥＶＥ実行委員会と協力し、同志社ＥＶＥでの環境対策に取り組んでいます。もともと、ＤＥＰでは最も基本的な環境活動の１つとして、「ごみ」に関する取り組みをしたいと考えていました。実際の社会では、大企業によるエコカーや排出権取引といった、環境に配慮した商品や技術、取り組みが注目されていますが、最も環境に向き合っていると言えるのは、私たちが普段の生活から出るごみを回収して処分している業者ではないかと思ったからです。そこで、環境に最も向き合った活動としてごみ分別に取り組み、さらに同志社の学生にも啓発できる機会として、伝統ある同志社ＥＶＥに協力することとなりました。

この精神を引き継ぎ、２０１０年度も同志社ＥＶＥに参加することで、ＥＶＥの環境対策と参加者への啓発はもちろん、我々メンバーへの環境への意識を再確認することにしました。

１３５ｔｈ同志社全学ＥＶＥは11月26日～28日に開催され、ＤＥＰはその全日の後半の時間帯において活動に取り組みました。活動内容は２００９年度に引き続き、ごみ分別のナビゲート、割りばしの回収、流し台の清掃の３つでした。ごみ分別のナビゲートは、来場者が捨てるごみを「燃えるごみ」「ペットボトル」「割りばし」といった６種類にわける案内と手伝いをするだけですが、キャンパス全域から大量のごみが出ることに加え、学生の環境意識が決して高いと言えないこともあり、燃えるごみにペットボトルや割りばしを入れられたりすることも多く、身体的精神的にも大変負荷のかかる活動でした。さらに、回収した割りばしの内、あまりに汚れのあるものはリサイクルに回せないため、割りばしの仕分け作業の必要もありました。

このように、非常に人手のかかる活動でしたが、ＥＶＥ自体の開催期間が３日間に減ったこと、そして、ＥＶＥ実行委員との連携とご厚意により、一日の前半を出店の局員の方に担当してもらい、ＤＥＰメンバーの活動時間が１日の後半のみになったことで、意義を損なうこと無く負担は軽減されました。また、一日の終わりには残飯と悪臭の漂う流し台の清掃を行い、終電ぎりぎりになるメンバーもいましたが、無事に３日間を終えることができました。

WSES2010



世界各国の学生が環境問題について議論する世界学生環境サミットは、２００８年にＤＥＰメンバーが考案し、学生が協力して同志社大学で第１回大会を開催したもので、以降、第２回は、カナダ ヴィクトリア大学にて開催、第３回は、ドイツ チュービンゲン大学において開催されました。

第３回は、２０１０年９月20日から25日まで、世界25カ国36大学から65名の学生が集まり、開催されました。ヨーロッパ、南北アメリカ、アジア、アフリカ、オセアニアなど世界全大陸からの参加があり、ＤＥＰからは同志社大学代表として１名、サミットスタッフとして２名が参加しました。今回のサミットでは、参加学生が政治、経済、市民社会の３つのグループに分かれ、各分野における専門家の講義を受けました。それを受けてグループワークで環境問題について議論をし、またその結果を全体会で報告すると言う形で進められました。

サミットでは、一緒に生活し文化の違いを肌で感じながら友好を深めつつ、それぞれの大学内で行われている環境活動を紹介しながら学生の立場から環境問題の解決について話し合い、その成果をそれぞれが大学に持ち帰り、更なる環境活動への貢献を大きな目標としています。世界中からやってきた参加者の大会への意気込みや取り組み姿勢は熱いものでした。メインホールの外では、各大学の環境活動のポスターセッションも行われ、ＤＥＰの活動に興味を示していた学生も多く、温度設定の取り組みを自分の大学でもぜひ実践してみたいといった声もあがりました。

この大会の成果として、代表者が70頁にわたる「学生意見書」をまとめ、10月４日にベルリンにてドイツの環境省に提出し、さらに11月のメキシコで開催された、ＣＯＰ16にも提出しました。

COP16

２０１０年11月29日からメキシコのカンクンで開催された「国連気候変動枠組み第１６回締約国会議（ＣＯＰ16）」にＤＥＰメンバーであり、「世界学生環境ネットワーク（ＷＳＥＮ）」スタッフの学生３名が参加しました。

目的の一つは今年のドイツ・テチュービンゲン大学での世界学生環境サミット（ＷＳＥＳ）で採択された「学生意見書」をＣＯＰ16議長（メキシコ環境大臣）に直接提出することでした。メキシコ環境省役員の方に真摯にご対応いただき、学生意見書を議長に提出すること、ＣＯＰ16ホームページでの学生意見書の公開、次回ＷＳＥＳに参加するメキシコの大学の紹介等を約束していただきました。

またブース会場において、取り組み紹介のプレゼンテーションを行いました。参加学生３人の対話形式による説明を行い、なごやかな雰囲気で聴衆者の関心を誘いました。熱心な聴衆者が多く、終了後も質問者の対応に追われました。今年はブースを確保したことで、多くの方が本取り組みに関心を持たれて立ち寄っていただき、ＷＳＥＳへの新たな参加希望者を生み出せたことも大きな収穫でした。

さらに今後のＷＳＥＮ＆ＷＳＥＳの発展のため、「国連気候変動枠組条約（ＵＮＦＣＣＣ）」事務局との連携を実現させることを目的とした，ＵＮＦＣＣＣスタッフとのミーティングが実現しました。約30分間でしたが、今後のＷＳＥＮ＆ＷＳＥＳの活動にとって極めて重要なミーティングとなりました。このミーティングでは，まずＷＳＥＮ＆ＷＳＥＳの活動を評価していただいた上で、ＵＮＦＣＣＣのコンタクトパーソンの紹介や、今後のサミットへの講演者の派遣、国際会議でのプレゼンテーションの機会の提供を約束していただきました。このように、今回のＣＯＰ16での活動は今後のＷＳＥＮにとってきわめて有効な成果をあげるものとなりました。

また、ＵＮＦＣＣＣスタッフやメキシコ環境省役員とのミーティングでは、両者ともＷＳＥＮへの期待は予想以上に大きく、ＷＳＥＮが世界の大学での環境活動を増進させていく要の組織になることを期待され、未来社会を支える学生の環境意識を喚起させる使命を担うことの重要性を再認識しました。そのためにも、まずはＤＥＰが日本の大学を先導する環境活動を展開していく必要があり、今後も精力的に活動をしていきたいと思います。

メンバーインタビュー　外部イベント編

「誇りに思うというか、自信のある活動ができました」

【氏名】下山 凌平
【学部・回生】経済学部2回生
【活動歴】2年目
【参加】第２回環境学生討論会

「環境問題を世界規模で考える意味が大きなって気づいた一年でした」

【氏名】伊藤 友里加
【学部・回生】商学部3回生
【活動歴】3年目
【参加】WSES, COP16

討論会やサミットなど、普段とは違う学生や場所に触れ合うことでしか見えないものもあったのではないでしょうか。討論会に参加した下山くんとＷＳＥＳに参加した伊藤さんはどのように感じたのか、伺ってみました。

―この一年の活動の中で、環境に対する認識に変化がありましたか？

伊藤：１回生のころは、実際どうなんだろう？何が地球温暖化なのか？とかを知りたかったんですよ。

でも、それよりも最近は、どうやったら意識を向上できるんだろう？広められるんだろう？という方向に意識が向いています。海外の学生とふれあうなかで、日本で考える環境問題に対する価値観とは全然違うことを思い知らされて。例えばインドネシアの学生は、環境問題に費やすお金なんかないんだよ、ってズバッと言ってました。

Glocal※てよく言うけれど、世界のいろんな事情を知った上で、自分の地域ではどのように取り入れるのが良いのかって、考えることが重要だなと感じました。だからこそ、一番身近な同志社ではどうしたら啓発できるのかなって、よく考えてますね。

下山：すごくわかります。討論会では、同じ日本ですが、農山村の行政に対して政策提言をする中で、経済や福祉、教育など、いろいろなことを考えないといけなくて、その様々な問題の中の1つとして、環境を捉える必要がありました。そうすると、環境だけを捉えるんじゃなくて、他の問題にもアプローチする中で環境を捉えることが大事じゃないかなって思いました。

それを通して、僕も身近なところではどうしたら環境を取り入れるのかなって感じるようになりましたね。

―他の団体の環境活動と何か違いを感じましたか？

伊藤：啓発の方法で多かったのが、何かこれをしよう、て訴えるんじゃなくて、啓発活動にみんなを巻き込むんですよ。その様子がとにかくカッコいい、楽しそうって感じさせていました。

海外のＮＧＯで、CO_2の濃度を団体名にしているところがあって、それを世界のいろんなところ、例えば、海のなかに潜ってその数字を表現した写真を撮るっていう活動をしているそうなんです。

それって、実際に環境に影響を与えてるわけじゃない。けど、おもしろいなって思いました。それを見た人は自然に意識の中にその数字が埋め込まれると思うんですよね。そういう発想の団体って日本にはないなと思いました。

下山：すっごい考えたんですけど、ないなって。（笑）

逆に日本だと、そんな変らない、良い意味で一緒ってのが結論ですね。もちろん、考え方の違いはあると思うんですけど、環境活動をしていたら、例えば環境教育なら似たようなアプローチだと思いました。

だからこそ、同じ環境ってのをキーワードに向かっている、それだけの共通点で、討論会で仲間意識も持てて協力できたんだと思います。

―この一年の活動から何を得ましたか？そして、次はどうしますか？

下山：自信を含めた経験ですかね。5月くらいから12月まで7ヶ月くらいの長い期間で、誇りに思うというか、自信のある活動ができました。

大げさかもしれませんが、自分が人生で一番輝いてた、小6の頃を超えるほど頑張れたと感じることってなかったんです。でも、この一年は、それに匹敵するほど頑張れたんじゃないかなって、自信を取り戻せました。

伊藤：世界の学生とふれあえる機会が得られて、環境問題を世界規模で考える意味が大きいなって気づいた一年でした。同じように環境問題について考えて、同じ問題を解決しようと行動してる人が世界中にいて、それを知った上で身近なところでどうするかってことが大事だなって感じました。

会った人や活動の内容は違えど、同じ環境問題に向き合う人たちと接することで、感じたところには似た面も多くあったようです。言葉も文化も違っても、環境問題に向き合うというだけで分かり合えるというのは素晴らしいことではないでしょうか？

※[Glocal]
Think globally, act locally(地球規模の視野で考え、地域視点で行動する)という考え方を表す、Globalとlocalをかけ合わせた造語。

特集●保存版　これであなたもエコ博士！～COP10で何が世界標準になったのか？～

■昨年10月、愛知県名古屋市で生物多様性条約第10締約国会議（CBD-COP10）が開催されました。171カ国の代表が集まった会議で、地球の生物多様性を守るために何が決まったのか？私達全員の未来を守る重要な取り決めについて、詳しく見ていきましょう！

■COP10では、報道などで注目された遺伝資源の利用と利益配分に関する「名古屋議定書」のほか、締約国の行動やルールを決める47の議決が採択されました。これらの議決は、締約国や条約事務局が今後、実施すべき行動の設定や生物多様性に関わる活動に関するガイドライン（指針）などを決めたものですが、議定書として発効されたもの以外は法的拘束力は特になく、各国の自主性にゆだねられます。今回は、その中でも日本の生物多様性保全や地域の保全活動に役立つポイントをご紹介します。

■実効性を意識した新戦略目標（通称　愛知ターゲット）

今回決定した新戦略目標（2011～2020）は、前回の戦略目標より、実効性を意識した内容になりました。多くの個別目標に数値が定められたほか、戦略目標をAからEまで設け、直接・間接の原因から対策、その成果までを一体でとらえる5つの枠組みを設定するなど、以前よりも個別課題での取り組み目標が明確になる工夫がなされています。また今回は、「作っただけに留めない」取り組みが決まりました。例えば、条約の多年度計画では、COP11とCOP12において各国での愛知ターゲットの取り組み状況を評価し、COP11までの事前会議の中で、世界レベルあるいは国レベルの進捗を図るための指標について専門家会合を設けることが決まりました。では以下、注目すべき目標を見ていきましょう。（本文は環境省のウェブサイトをご覧下さい。）

■戦略目標A「損失の根本原因を無くす」

【目標1～4】

目標2に「国家勘定」という言葉があります。これは「GDP（国内総生産）のような国を測る指標に生物多様性という観点を組み込む」ということです。その国の持つ生物多様性がもたらす能力を自然資本のような形で数値化しようというもので、世界銀行などはその具体化のためのプロジェクトを始めることを発表しました。

目標3は、生物多様性に悪影響を及ぼす事業を指摘し、その事業への公的資金（元は私達の税金）の流れを断つことを目指した目標です。例えば、「生物多様性の尺度からの事業仕分け」をするなど、悪影響のある公共事業・予算をストップさせるといった働きかけが考えられます。未だに公共事業によって生物多様性が破壊されている日本では重要な目標です。

■戦略目標B「直接的な圧力を減らす」

【目標5～10】

注目は目標5の、生息地に関する記述です。象徴的な生態系というところから、「森林を含む」と強調されています。ですが、サバンナや草地、湿地、マングローブ、サンゴ礁なども危機的生態系であるという議論もなされていたので、森林以外も含めた広い意味合いがあります。このような地域は、重点的保全策を進めることが求められています。

■戦略目標C「生態系・種・遺伝子の多様性を守る」【目標11～13】

注目は目標11です。陸上の17％、海の10％を効果的に保全するという目標ですが、それを補足する形で様々な条件が付いています。これからは、「効果的に管理されている」「（地域住民も参加するような方法で）公正に管理されている」「孤立していない、生態学的連続性が確保されている」「周囲の景観との整合が取れている（保護地域の外も生物多様性に配慮されているような地域を目指す）」という点が必要とされており、これは本当に意味のある保全地域にするためには欠かすことのできない点です。

■戦略目標D「生物多様性からの恵みの強化」

【目標14～16】

生物多様性の保全を担う地域（途上国や過疎地／里山）と利用する地域（先進国や都市部）が負担・利益を分かち合うこと（目標16）などを今後の戦略づくりの基本に据え、具体的な実施方策を積み上げていくことこそが目標達成への近道になるでしょう。

■戦略目標E「参加型の計画づくりと実施を強化」

【目標17～20】

注目は目標17と目標20です。目標17はCOP10の成果とこの愛知ターゲットを実施するために国家戦略・行動計画の設定や改定を世界全体で目指したものです。日本政府・環境省は、このために2011年度に生物多様性国家戦略の改定に向けた検討会を立ち上げることを決めました。

目標20の資金に関しては、COP10でも議論が紛糾し、完全にはまとまりませんでした。COP10では、どのように資金拡大の進捗を測るかという「指標」（例えばODAの増額）までは決めましたが、その指標をベースとした「目標値」（ODAによる資金拡大をどこまで拡大するか）までは合意できず、COP11にその決定を持ち越すことになりました。

以上、新戦略目標より、注目すべきポイントを見てきました。地球環境を守るために何より大切なのは、このような目標を私達一人ひとりが当事者として認識し、行動することです。

【引用・参考】『自然保護　1・2月号』（財団法人 日本自然保護協会 発行）

編集後記

田中梨絵子
同女現代社会学部(3)

人のプラスとなる存在でありたい

高山俊一
理工学部(3)

行動で示せる人間になる。

下山凌平
経済学部(2)

練馬区長へ向けた確かな一歩をDEPで歩むこと

森誠三郎
理工学部(1)

仕事は早く・正確に質を良く！

浅井保匡
経済学部(3)

潰すこと
繋げること
広げること

田畑剛志
法学部(3)

後輩たちに全て託せるように。

吉本篤規
経済学部(2)

DEPで学んだことを違う場所で活かす

川島弘嗣
経済学部(1)

DEPのみんなに頼られる人になる！

松本歩
文化情報学部(3)

許容範囲＝最低ライン

棚瀬将康
理工学部(3)

Let's e-サイト！

村田諒平
理工学部(3)

見える組織運営を！

三河千里
法学部(2)

自分らしく環境と向きあう！

濱田陽平
経済学部(3)

成長と経験の還元でDEPに恩返し！

田中頌宇将
経済学部(1)

でっぱーになる。

藪北寛之
社会学部(4)

初心を忘れず

川口冴美
同女現代社会学部(3)

伝える力・訴えかける力の向上♪

小野可織
経済学部(3)

私の周りからこつこつと発信

山本雅弘
文化情報学部(3)

計画性をもって行動する

竹村美佳里
同女現代社会学部(3)

まとめる＆伝える力をつける！

津戸隆文
文化情報学部(3)

DEP脳になる！

東千春
同女現代社会学部(3)

笑顔ときっかけを与えられる人になる

『次へのステップ』

今年度の活動を終えたDEPメンバーに、次の目標を聞いてみました。
私も一年を振り返ると、自分が思っていた以上にいろいろ考えて、動いてきたことに気づきます。私にとって、DEPで活動するのは2年目でしたが、新たに見えてきたものもたくさんあり、同じ団体でも全く違う色の一年を過ごすことができました。その一年一年が、自分にとってどんな意味をもつのか。後になって、気づくこともあるのでしょう。ひとりひとりが、自分のやり切った活動をしっかり見つめ、次へのステップへとつなげていく。一年一年が、次の年の原動力になる。そんな目標をもった人の存在が、DEPという団体の勢いと持久力になるはずです。
これからも成長し続けるDEPをよろしくお願いします。

藤本一貴
理工学部(1)

「なぜ？」を大切にします。

小川順子
同女学芸学部(3)

足を動かす！
『多様』の取り込み！

金森春音
社会学部(1)

地球と幸せになる(・ω・)♪

丸吉宏和
商学部(1)

DEP1のエコ博士になる

橋本明英
工学研究科(M2)

自立して生きる。

鈴木佑梨
法学部(2)

いつもと違う視点を持つ！

篭橋直人
文学部(3)

自分の環境をもっと好きになる

〆野景一朗
経済学部(3)

全く新しい手法で環境を捉える。

高野恵理子
文学部(4)

古着も5年後は流行fashionかも☆

栗原和音
理工学部(2)

外の空気を思いっきり吸い込む♪

高野詩織
法学部(2)

日本一エコな大学を目指す！

宮城修斗
政策学部(4)

DEPでの活動を誇りに頑張ります。

藤井春奈
商学部(4)

仕事をがんばる！！

伊藤友里加
商学部(3)

同志社をもっとエコに^^☆

鹿取大祐
理工学部(3)

地球へ。感謝、尊敬、愛します。

宮崎礼奈
商学部(1)

DEPの認知度UPを目指す

新メンバー募集！！

環境問題に関心のある方、また、DEPについてもっと詳しく知りたい方は、下記の連絡先まで連絡して下さい。

MAIL：dep.asumi@gmail.com
HP：http://eco-pro.doshisha.ac.jp/

DEPのアピールPoint♪

1. サークルではない、大学組織だから出来る大規模な活動。
2. 多学部多学科、多様なメンバー構成。
3. 自分のスキルUPにも役立つ。

OP会

2011年2月に、DEPのOPで構成されるOP会が発足しました！OPとは、OBとOGをまとめた人を指します。
頼もしいOP会が存在することで、現役メンバーは、設立当初の思いを引き継ぎながら、さらなる発展を目指すことができます。また、OP会はOPが社会に出て得た知識や経験を、現役メンバーが利用しやすい環境を整えていきます。